

勢多だより

No. 100

DECEMBER 22

2014

若鮎祭特集・夏の課外活動

第40回「若鮎祭」を終えて

第66回 西日本医科学学生総合体育大会

- 新任教員紹介
- 海外自主研修
- ヨット部による追悼慰霊式



勢多だより

DECEMBER 22, 2014

C O N T E N T S



メインテーマ：「若鮎祭特集・夏の課外活動」

トピックス

- | | | | | |
|----|------------------------------------|-------|---------|-------|
| 01 | FUNTASIA の日 | 実行委員長 | 医学科第4学年 | 赤井 勇介 |
| 03 | 「若鮎祭」実行委員の感想 | | | |
| 06 | 平成26年度学生表彰 | | | |
| 08 | 第66回西日本医科学生総合体育大会 | | | |
| 09 | 開学40周年記念講演会・記念式典・記念祝典
開学40周年の集い | | | |

図書館からのお知らせ

- | | |
|----|------------|
| 10 | 著作権講座(その1) |
|----|------------|

新任教員紹介

- | | | | |
|----|------------------------|-----|-------|
| 12 | 内科学講座(呼吸器) | 准教授 | 中野 恭幸 |
| 13 | 生化学・分子生物学講座(再生・修復医学部門) | 准教授 | 寺島 智也 |
| 14 | 泌尿器科学講座 | 准教授 | 成田 充弘 |
| 15 | 外科学講座(消化器外科、乳腺・一般外科) | 教授 | 谷 眞至 |

キャンパスライフ

- | | | | | |
|----|-----------------------|---------|----------------|--|
| 16 | 海外自主研修 | | | |
| | ジョンス・ホプキンス大学での8週間 | 医学科第4学年 | 小田垣 彩花 | |
| | バングラデシュでの自主研修報告 | 医学科第4学年 | 西 明博 | |
| | マレーシア国民大学での自主研修 | 医学科第4学年 | 宗 像潤 | |
| | チョーライ病院自主研修体験記 | 医学科第4学年 | 久保田 浩之 | |
| 24 | 平成26年度滋賀医科大学奨学金奨学生の決定 | | | |
| 26 | ヨット部による追悼慰霊式 | | | |
| | 2014年嶋岡さん追悼慰霊式 | 医学科第3学年 | ヨット部主将 西 藤 知 城 | |

アジア疫学研究センター紹介

- | | | | | |
|----|--------------------------|------|-------|--|
| 27 | アジア疫学研究センターにおける疫学研究(その1) | | | |
| | アジア疫学研究センター | 特任助教 | 久松 隆史 | |

国立病院機構 東近江総合医療センターだより

- | | | | | |
|----|----------|---------|-------|--------|
| 30 | スキルラボの開設 | 総合外科学講座 | 教授 | 来見 良誠 |
| | 皮膚科の紹介 | 総合外科学講座 | 非常勤講師 | 鵜飼 佳子 |
| | 眼科の紹介 | 総合外科学講座 | 非常勤講師 | 須賀 美保子 |

インフォメーション

- | | | | | |
|----|---|--|--|--|
| 35 | 平成26年度第1回学位授与式 | | | |
| 36 | 平成26年度滋賀医科大学医学部医学科第2年次後期学士編入学並びに
平成26年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式 | | | |
| 39 | 第40回解剖体慰霊式
平成26年度研究動物慰霊式 | | | |
| 40 | 男女共同参画推進のための講演会 | | | |

編集後記(宮松編集長)

トピックス

FUNTASIA の日

— 第40回「若鮎祭」を終えて —

第40回若鮎祭実行委員会委員長
医学科第4学年
赤井 勇介



FUNTASIA、そう題した若鮎祭が終わりました。しかし、私自身、まだ夢の中にいるような気分です。幸いにも何年かぶりの好天に恵まれた若鮎祭になりましたが、それに負けじとまだに私の中で大きな輝きを放ち続けています。

ちょうど1年前、私は委員長を引き受けました。先輩方の作り上げた若鮎祭を間近で見て、来年もこの場所で、もっと近くで若鮎祭に携わりたい、そう思ったのが決め手でした。以前から先輩や友達からも委員長になるよう勧められてはいましたが、私自身そんな表舞台にたつようなキャラではないし、ほかにも適任はいると思っていました。しかし、若鮎祭が終わった今、委員長として若鮎祭をつくることができ本当に良かったと思います。

トップとして実行委員会を率いて思ったのは、一緒に若鮎祭をつくりあげた仲間の頼もしさでした。委員長を引き受けたものの、部活の忙しさもあり正直、十分な仕事ができたとはいえません。しかし、

そんな時でも執行部をはじめ、実行委員ひとりひとりが一つの若鮎祭に向かって動いてくれて、とても助けられました。

FUNTASIA、自由な想像力で楽しい若鮎祭を作りたいという想いをテーマには込めました。分かりづらいテーマにしてしまったとは思いましたが、この仲間たちなら形にしてくれるだろうと確信していました。実際、一つのFUNTASIAというテーマのもとに若鮎祭をつくりあげることができたと思っています。

委員長として至らない点多々ありましたが、実行委員会のメンバーが支えてくれたおかげでFUNTASIAを達成することができたと思います。大変な場面もありましたが、乗り越えてこれたのは素晴らしい仲間にも恵まれていたからです。若鮎祭後の打ち上げでこのような言葉をいただきました。

「6年間で一番楽しい若鮎祭やったわ」
その言葉を聞いたときは本当にうれしかったです。





自分で言うのもおかしな話ですが、実際、本当にそうだったと思います。素晴らしいメンバーに恵まれ、第40回という素晴らしい節目の時に素晴らしい若鮎祭にすることができました。

「想像力のないやつに翼は持てない」天才ボクサーモハメドアリの言葉です。今回の若鮎祭を経て、この言葉の意味を噛みしめました。想像力というのは素晴らしい力を持っています。何か大きなことをなそうとすれば、想像力がなければ何もできません。流されるだけの毎日だった私にとって、非常に学ぶことの多い1年間でした。FUNTASIAの日、今回の若鮎祭の3日間そしてそのための1年間は私にとってかけがえのないものになりました。

最後となりましたが、塩田学長、堀池副学長、松

末病院長をはじめとする大学、病院の教職員の皆様、永田学生生活支援部門長をはじめとする学生生活支援部門の先生方、湖医会をはじめとするOBOGの皆様、協賛してくださった企業の皆様、若鮎祭に参加してくださった方々、私を委員長に推挙してくださった林谷前委員長、そして医学科4年、看護学科2年の実行委員のみんな、本当にありがとうございました。

第40回若鮎祭は皆様のご理解、ご協力のおかげで無事成功を収めることができました。これからも続く若鮎祭がますます発展していくことを願い、私の文章を終えたいと思います。ありがとうございました。



「若鮎祭」実行委員の感想

副委員長 医学科第4学年 寺尾 理知

第40回若鮎祭を終えて

第40回若鮎祭がフィナーレを迎えたとき「副委員長として、この執行部の一員として若鮎祭に関わることができて良かった!」と思いました。一年前、第39回若鮎祭でほんの少しだけ受付の仕事を手伝った時には若鮎祭というものがどれほどの時間や労力、たくさんの方々のご協力のもとに成り立っているのか全く想像できませんでした。滋賀医科大学の先生方、先輩方や地域の方々の大きなお力添えのもとに成り立っていること、医学科4年生・看護学科2年生の全員がそれぞれ仕事を任せられ、それに全力を尽くしていることなど今までに知らなかった若鮎祭を見つけることができました。私にとって今までで最高の若鮎祭になりました!ありがとうございました!

副委員長 医学科第4学年 前川 洋子

無事に若鮎祭を開催することができたという充実感と安心感でいっぱいです。今年の若鮎祭は第40回という節目の年であり、伝統を受け継ぎつつもテーマソングやパレードといった「FUNTASIA」という今年のテーマに沿って、みんなで想像力を働かせた新しい取り組みも積極的にたくさん取り入れたとっても素敵な若鮎祭になったと思います。このような素敵な若鮎祭に副委員長の一人としてたくさんの人と共に運営に関わることができ、とても楽しかったです。貴重な体験ができ最高の思い出となりました。

最後になりましたが、若鮎祭に関わってくださった本当に本当にたくさんの方々に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

副委員長 医学科第4学年 松浦 智史

第40回若鮎祭開催にあたり、ご支援・ご協力くださった方々に感謝・お礼申し上げます。昨年度に今回の若鮎祭実行委員会副委員長をさせていただくことが決まり、本番までのおよそ半年間を振り返り、達成感でいっぱいというよりは大きな問題もなく無事に終わることができてほっとした気持ちになっているのが正直なところでした。赤井委員長をはじめとして、各局の局長が役割を果たし、それを各局会計や局員などにうまく伝達し連携できたこともあり、副委員長として何かサポートに回ることや大きな問題に直面したということも比較的少なかったように思いますが、今回の若鮎祭が少しでも多くの人を楽しめるように、何か役に立てるようにということを目指して取り組んでこられたように思います。

自分たちの学年が看護学科2年生と協力し、実行委員として運営してとても嬉しかったことがあります。それは「今年の若鮎祭もよかった」という言葉をいただくことがありましたが、これは若鮎祭に向かっていろいろ頭を悩ませ、直前まで試行錯誤してよりよいものになろうと努力する実行委員全体の頑張りに向けられているのだらうなと感じ、そしてその頑張りが認められていることを実感できたことです。来年度の若鮎祭も、来年度の実行委員全員で作上げ、よりよいものになることをお祈り申し上げます。

副委員長 看護学科第2学年 田中 杏奈

若鮎祭を終えて

副委員長として、今回の若鮎祭に参加させて頂きました。執行部の活動や、他局のお手伝いをして、普段の生活ではあまり関わらないであろう4回生さんと仕事をし、個人的にも知り合いが増えました。若鮎祭が終わってからも、学内で挨拶をすると気さくに返していただけてすごく嬉しい気持ちです。また、打ち上げの際には、皆さんに「楽しい若鮎祭をありがとう」と言っていただき、「本当に良い若鮎祭だったんだな。」と達成感でいっぱいです。本当にありがとうございました。

若鮎祭を一番楽しんだのは私ではないかと思えます。来年実行する側の学生の皆さんには、ぜひ執行部に入ることをオススメします!充実した日々を送れますよ!



副委員長 看護学科第2学年 吉田 彬人

副委員長として

今年の若鮎祭のテーマは「FUNTASIA～fun to image fun to magic～」。魔法の世界のような楽しい若鮎祭を作ろうと、赤井委員長を筆頭に4月から準備を進めてきました。

僕の役職は実行委員の副委員長でしたが、実際に副委員長っぽいことをしたわけでもなく、周りの方たちが忙しそうに仕事をしているのをただただ見ていること(たまにはちゃんと手伝います)しかできませんでした。本番もあまり仕事をしなくてすみません。でも、ものすごく楽しませてもらいました。執行部の感想として「楽しませてもらった」はどうかと思いますが、みなさんが一生懸命、それでいて楽しそうに準備をしている姿をみて、そしてあのすばらしい若鮎祭に参加できて本当に楽しかったです。本当にありがとうございました！

会計 医学科第4学年 音羽 祐兵

若鮎祭の会計を担当して

今年も多くの方々のご協力のもとに若鮎祭を開催させていただくことができ、大変うれしく思います。本年度は天候にも恵まれ、例年より多くの方にご来場いただくことができました。実行委員会各人の努力が実を結び、近年では稀にみる幻想的な若鮎祭として幕を閉じることができました。また、若鮎祭が成功をおさめることができたのは私たちの努力だけではありません。学内外の先生方や先輩方のご支援とご協力がなければ、若鮎祭は第40回の開催を迎えることはできなかったはずです。地域の皆様をはじめ、先生方ならびに先輩方、学生課、医師会、後援会、学生団体など多くの皆様に厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

ステージ局長 医学科第4学年 川北 憲人

「魔法に魅せられて。」

『ステージを観てくれる方々に“FUNTASIA”の魔法をかけたい!!』その強い思いを胸に、ステージ局員一丸となってこの約半年間突っ走ってきました。

グランドフィナーレでは、最後を締めくくるにふさわしいパレードを行い、大成功をおさめました。パレードで、赤井委員長に“FUNTASIA”の魔法をかけられてしまった方々も大勢いらっしゃるのでないでしょうか。

フィナーレのみならず、企画・KOE・ミスコン・LIVEなど、すべてにおいて「自分たちにしかできないものを」をモットーに局員全員で、全力で取り組みました。私たちの想いがステージを観て下さった皆様の心に届き、2014年若鮎祭のステージ面白かったなあと感じただけならば、とてもとてもうれしいです。2014年若鮎祭のステージを観に来て下さった方々、盛り上げて下さった方々本当にありがとうございました。

そして、一緒に最後まで頑張り支えてくれた局員のみんな、執行部のみんな、ステージを支えて下さったすべての方々に、心より御礼申し上げます。皆様のおかげで最高のステージになりました。本当にありがとうございました!!

ステージ局副局長 看護学科第2学年 山本 歩実

私は、ステージ局副局長を務めさせて頂いたのですが、今回の若鮎祭は、これまでとは違う新しいステージを目指し、四回生の先輩を筆頭にステージ局員一同で準備しました。毎年恒例の企画を行わず、ゼロから案を考えだしていく分、時間も労力もかかりましたが、そのかいあって、若鮎祭当日、メインステージも順調で、サブステージには例年にないほどの観客が集まり、大成功を収めました。

私は副局長だったものの、先輩方についていっただけで、協力できた自信がないのですが、若鮎祭を終えるフィナーレの最後には一人前に感動してしまいました。4回医と2回看護の、100名以上の仲間が協力し、一つのものを作りあげたという事への感動だと思います。

初めは副局長なんて...と思っていましたが、今は若鮎祭の成功、またそれまでの過程を間近でみられた事に感謝しています。

企画局局长 医学科第4学年 原田 彩香

若鮎祭を運営してみて

本年度は、企画局長という形で若鮎祭に関わるようになりました。夏まで部活の主務も務めており、両立できるか不安なことも多々ありましたが、今は無事終わることができてほっとしています。

若鮎祭を運営する側になって思ったのは、一つの企画を実現するためにはたくさんの人の支えが必要だということです。実現可能なのか、どこで行うのかなど、沢山の話し合いを重ねました。外部の方も含め、多くの人と知り合えたことは、貴重な経験になりました。

各々の企画を、責任を持って進行してくれた局員の皆さん、それぞれのエリアをしっかりとめてくれた班長の方々には本当に感謝しています。誠にありがとうございました。

企画局副局長 看護学科第2学年 澤村 真菜

若鮎祭を終えて

今回の、第40回の若鮎祭は、私にとって2回目の若鮎祭、執行部としては初めての若鮎祭でした。2日間とも天候に恵まれ、素晴らしい若鮎祭になったと思います。

企画局の副局長としては、正直言ってあまり仕事ができなかったわけでもなく、役に立てたと自信を持って言うことはできません。それでも、体育館・食堂・講義室・駐車場・講演会それぞれの場所で、例年を超える来場者の方々に若鮎祭を楽しんでもらえて、達成感でいっぱいです。局長の原田さん、局員の皆様には本当に感謝しています。

執行部の一員として、学祭期間は忙しかったのですが、とても充実した日々を送ることができました。来年、執行部を務める方も、ぜひこの達成感を味わって、楽しんで若鮎祭を終えてほしいと思います！



広告局局长 医学科第4学年 大張 靖幸

始めにこの誌面をお借りしまして、第40回滋賀医科大学若鮎祭にご賛同いただき、寄付および広告掲載頂きました皆様に厚く御礼申し上げます。我々広告局は広告掲載契約を皆様と結ぶことを通じて、あらためてこの若鮎祭が皆様に支えられていることを実感しております。今年皆様より頂きましたご意見等を来年にしっかりと引き継いでいきたいと思っておりますので、これからも若鮎祭をどうぞよろしく願いいたします。本当にありがとうございました。

私が広告局局长の打診を受けたのは2月下旬で、その後あれよあれよという間に作業がはじまりました。その場で軽〜く引き受けたことがこの半年間の生活を変えたのは間違いありません。ただ、局員も同様に半年間、本当によく協力してくれ、無事終わることができたと思います。皆さんありがとう！最後のパレードを見たときは良かったと思えました。来年の実行委員へのアドバイスは「騙されるな!」です。

広告局副局長 看護学科第2学年 上野 友大

実行委員を経験して

私は広告局の副局長をしました。広告局の仕事は営業に近いと思います。仕事を簡潔に述べると、若鮎祭に寄付して下さる病院やお店と契約し、広告をパンフレットに載せるというものです。書類作成から訪問に始まり、完成したパンフレットをお届けします。だから、広告の仕事は当日までがとても大変でした。けれども、その分当日は仕事がなく、若鮎祭中楽しませて頂きました。

今までこんな大きな規模の仕事を経験したことがなく、しんどさも正直ありました。けれども、契約の仕方や人を動かす力、そして責任の重さを実感し、今後の人生に大きく生かせると感じました。今は実行委員になったことを幸せに感じ、この経験を生かして今後臨んでいきたいです。

広報局局长 医学科第4学年 谷川 楽

今年は晴れに晴れて多数の来場者があったことに、とにかく安堵しています。広報局長として、もっと今年らしい活動を相談してみたり、もっと丁寧に仕事をしたり、色々改善できたと思うこともあります。たくさんの方の協力のもと、広報局の活動ができて本当に良かったです。自分の知る限りでも、局員や地域の方、学生課の方に助けていただいたので、本当に多くの方の力あってのものなのだと感じました。普段の生活では考えなかったであろうことがいくつもあるので、おかげさまで非常にありがたい機会をいただいたと思います。広報局の皆さん、関係各所の皆様、本当にありがとうございました。



広報局副局長 看護学科第2学年 上田 遥

今年の若鮎祭のテーマ

今年の若鮎祭のテーマ「FUNTASIA」に合うように私たち広報局では、看板、若鮎祭のウェア、パンフレットなどの作成を行いました。副局長としては最後の看板の指示をさせていただいたのですが、広報局のみなさんが協力的でデザインのセンスもある方ばかりで今年のテーマに沿った FUNTASIA らしい看板ができたと思っています。また、事前にポスターやティッシュ配りなどを広報局で朝から行った成果であるのかわからないですが、今年は去年より1.5倍も多くの方々に来ていただきました。私自身副局長という自覚が薄く、自覚をもったのは夏休みが明けてからだったのですが、それでも局員のみなさんがしっかりと働いてくださって本当に助かりました。また、局長さんにはいろんなアドバイスをたくさんいただいてとても支えになりました。看板もパーカーもPRもうまくいき、充実した若鮎祭でした。副局長をやらせてもらって本当によかったと思っています。

総務局局长 医学科第4学年 酒井奎太郎

若鮎祭を終え

今回、若鮎祭において総務局長という立場に就かせて頂きました。これまで16年間の学生生活の行事でこのような重要な立場にいたことがほとんどありませんでした。ましてや、若鮎祭に不可欠な物品・模擬店運営等を扱う総務局です。正直に言うと、就任要請が来た際は、僕でいいのだろうか、できるのだろうかという不安がありました。

ですが、何とか無事に、若鮎祭の準備・当日の運営を終えることができました。至らない点が多かった僕がここまでできたのは、若鮎祭が近づくにつれ、意識が変わり、より自分で考え、行動できるようになったのも理由の一つでしょう。しかし、何と云っても副局長・物品班・衛生班・模擬店班・駐車場班班長を初めとした局員のみなさんがついてきてくれて、支えてくださったおかげです。また、学生課の皆様にも若鮎祭前・当日、そして若鮎祭後までご協力いただき、ご迷惑をおかけする事になりました。今回の経験を今後の人生に活かせるかどうかは自分次第です。無駄にならなかったと言えるような生き方をしたいです。本当にありがとうございました。

総務局副局長 看護学科第2学年 北原 夢佳

皆さんに支えられて

すべてが終わった今、実行委員として記念すべき40回目の若鮎祭に携われたことを光栄に思います。総務局が依頼している人事派遣では、多くの部活の皆さんの力をお借りしました。この他にも若鮎祭全般の裏方的仕事を一手に引き受けなければならない総務局にとっては、多くの皆さんの協力が必要不可欠でした。このような多くの協力が積み重なり、若鮎祭が大成功していく過程を間近で感じる事ができたことを嬉しく思います。

私自身ができたことは本当にわずかなもので、局長さんをはじめ各班長さん、局員の皆さんの温かいご協力があって総務局が成り立っていました。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

平成26年度 学生表彰

10月25日(土)、第40回若鮎祭開会式終了後に中庭水上特設ステージで、滋賀医科大学学生表彰の表彰式を挙りました。

今回、表彰を受けたのは、平成25年9月から平成26年8月までの間に優れた実績、評価を得た5つの個人及び団体です。

受賞者には塩田学長から表彰状と副賞が授与され、受賞者への祝辞が述べられました。

受賞者	受賞理由
陸上部 医学科第1学年 大沼 玲佳	第66回西日本医科学生総合体育大会 陸上競技の部 女子ハンマー投げ 優勝
ヨット部	第66回西日本医科学生総合体育大会 ヨット部門 総合優勝
医学科第5学年 細尾 真奈美	平成25年度夏季自主研修において「女性医師のワークライフバランス」をテーマに学外(東京大学)にて研修を行い、その成果報告書により、平成25年度自主研修「優秀賞」を受賞した。 また、同テーマについて「第2回西予市おイネ賞事業 懸賞作文」医学生部門に応募し、最優秀賞である奨励賞を受賞した。
水泳部 医学科第2学年 吉田 耕輔	第66回西日本医科学生総合体育大会 水泳部門 男子400m個人メドレー 優勝
端艇部	第18回メディカルレガッタ 新人女子舵手付クォドルブル部門 優勝

博士課程の大学院学生によるポスター発表会の評価結果に基づく「優秀ポスター賞」の授与が学生表彰に先立ち行われました。

優秀ポスター賞	大学院(博士課程)第4学年 謝 宇 (しゃ う)
	大学院(博士課程)第3学年 ZAID MARYAM (ザイド マリアム)



学歌斉唱



学長の挨拶



端艇部への副賞の米 30kg の授与



第66回 西日本医科学生総合体育大会

今年度の西日本医科学生総合体育大会（通称：西医体）は金沢大学を主幹校として8月に開催されました。

昨年度に比べ個人種目等に8位以内の好成績が数多くあり、今年度の総合成績は24位（全44校中）となりました。

来年度のさらなる活躍を期待したいと思います。

クラブ名	種目	成績（ベスト8以上）
柔道部	団体戦	4位
ヨット部	470級	2位
	スナイプ級	1位
	総合	1位
水泳部	男子100m 自由形	5位 山本 大雅
	男子200m 自由形	6位 古田 諒
	男子100m バタフライ	5位 吉田 耕輔
	男子400m 個人メドレー	1位 吉田 耕輔
	男子800m 自由形リレー	6位
	女子100m 平泳ぎ	6位 加藤 温奈
	女子200m 個人メドレー	4位 加藤 温奈
ボート部	新人男子舵手付きフォア	2位、6位
	一般男子舵手付きフォア	4位
	一般男子ダブルスカル	5位
	総合	3位
	「西日本コメディカル大会」 新人女子舵手付きクォドルブル	1位
ハンドボール部		3位
	ベストイレブン・功労賞	村井 峻吾
ソフトボール部		3位
陸上競技部	男子400mH	8位 松浦 智史
	男子3000mSC	2位 脇坂 穂高
	男子5000m	6位 脇坂 穂高
	男子走り高跳び	7位 馬場 達也
	男子円盤投げ	2位 大石 健
	男子円盤投げ	6位 林谷 俊和
	男子砲丸投げ	2位 林谷 俊和
	男子砲丸投げ	5位 大石 健
	男子ハンマー投げ	6位 林谷 俊和
	男子ハンマー投げ	8位 大石 健
	男子やり投げ	5位 大石 健
	男子フィールド部門	2位
	女子3000m	8位 宇高 文
	女子円盤投げ	4位 辻嶋 涼子
	女子砲丸投げ	7位 大沼 玲佳
女子ハンマー投げ	1位 大沼 玲佳	
バドミントン部	男子ダブルス	ベスト4 平野・大井ペア
	男子ダブルス	ベスト8 北村・福尾ペア
	女子団体	ベスト4 舟山・島田・石原
女子バレー部		4位
卓球部	ダブルス	ベスト8 東・古川ペア

開学40周年記念講演会・ 記念式典・記念祝典を挙行了しました

10月3日（金）、本学の開学40周年を記念し、大津プリンスホテルにおいて、記念講演会・記念式典・記念祝典を挙行了しました。

記念講演会では、第62世三千院門主で叡山学院前院長・名誉教授の堀澤祖門氏を講師にお招きし、「枠を破る」の演題で講演が行われました。

記念式典では、塩田浩平学長が、この40周年を機に、我々は来し方を顧み、現状を分析して、これを10年後の50周年に向けた新しいスタートにし、「地域に支えられ、世界に羽ばたく」大学として新たな飛躍を目指すとの決意を述べ、引き続き、下村博文文部科学大臣（代読：吉田光成高等教育局国立大学法人支援課企画官）、三日月大造滋賀県知事、佐和隆光滋賀大学長、笠原吉孝滋賀県医師会長からご祝辞をいただき、来賓紹介、祝電披露が行われました。

記念祝典では、塩田浩平学長の挨拶に続き、井村裕夫（公財）先端医療振興財団理事長、長尾昌壽滋賀県病院協会会長、渡邊一良滋賀医科大学同窓会会長から祝辞が述べられ、馬場忠雄前学長の発声による乾盃、佐野晴洋元学長、嘉田由紀子びわこ成蹊スポーツ大学長、本庶佑静岡県立大学法人理事長からスピーチを頂き、本学開学40周年を盛大に祝い、最後は松末吉隆病院長の謝辞で閉会しました。

これらの行事には、来賓、名誉教授、教職員及び学生ら約300名が参加し、滋賀医科大学のさらなる発展を祈念しました。



堀澤祖門氏による記念講演



式辞を述べる塩田学長

開学40周年記念の集いを開催しました

10月25日（土）、若鮎祭の開催に合わせ、本学B講義室において、開学40周年の集いを開催しました。

塩田浩平学長の挨拶に続き、堀池喜八郎副学長が本学への赴任当時の、4期生である内科学講座の安藤朗教授が学生時代のエピソードをそれぞれ披露し、集まった学生や教職員は興味深く聞き入っていました。



堀池副学長による講演



安藤教授による講演

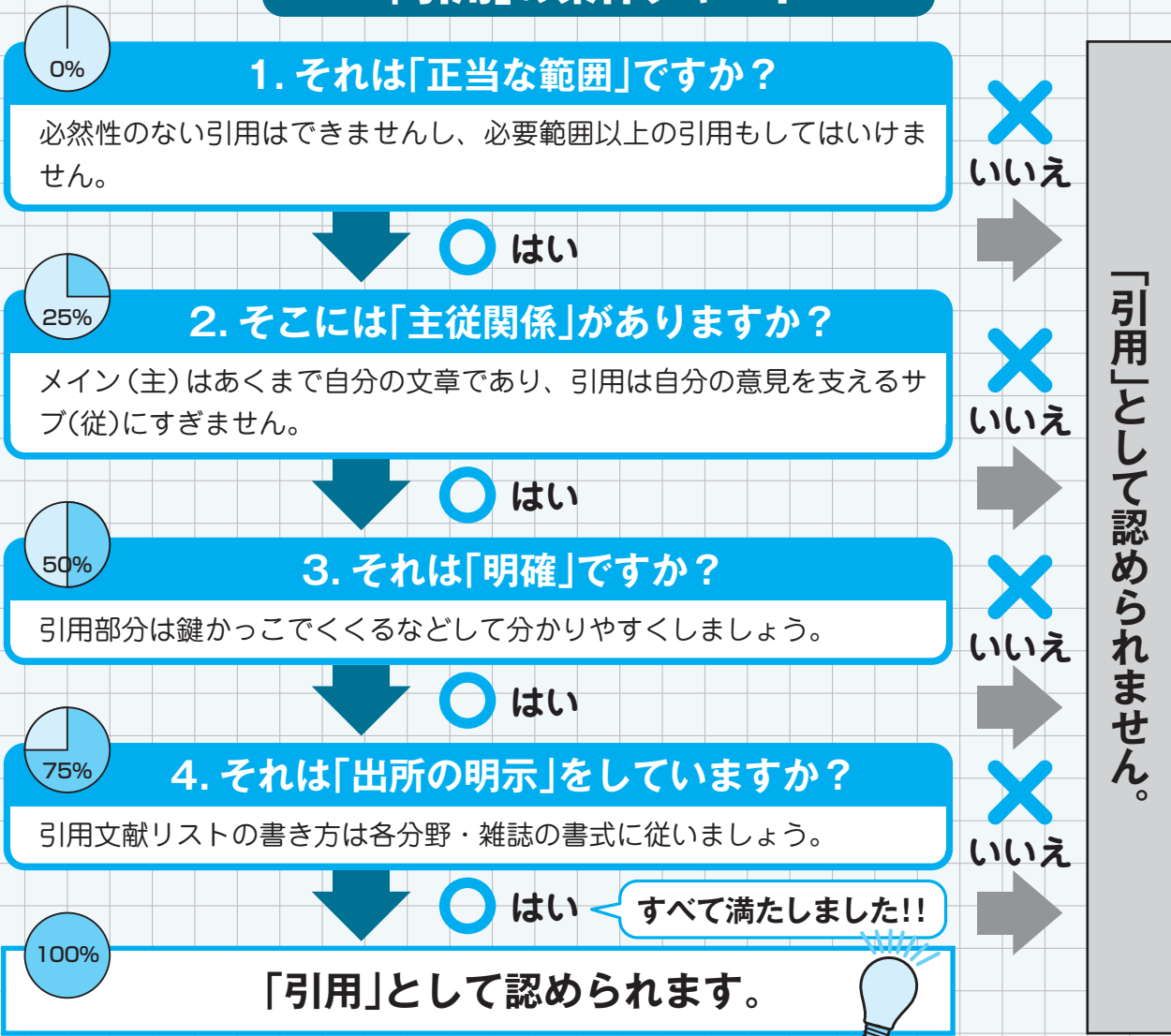
著作権講座 (その1) ～引用・自炊～

皆さん、著作権法をご存知ですか？ 著作権法は思想・感情を創作的に表現した小説などの著作物に対する著作者としての権利を保護する法律です。著作権法には一定の条件のもとで著作者の許諾なくその著作物を利用できるとした例外規定がいくつかあります。ここではその中から「引用」と最近話題になっている書籍などの「自炊」について少し見ていきます。

「引用」する際の条件は何？

「引用」とは自分の著作物の中に他人の著作物の内容を取り入れることをいいます。「引用」は例外的に著作者の許諾を得ずにその著作物を利用できることが認められています。ですが、引用する場合はいくつかの条件がありこれを守らなければなりません。

「引用」の条件チャート



引用の対象となるのは文章だけではなくありません。図やグラフ、写真、ウェブサイトなどもその対象です。これらを引用する場合もしっかりその「出典の明示」をしましょう。

「自炊」はどこからアウトなの？

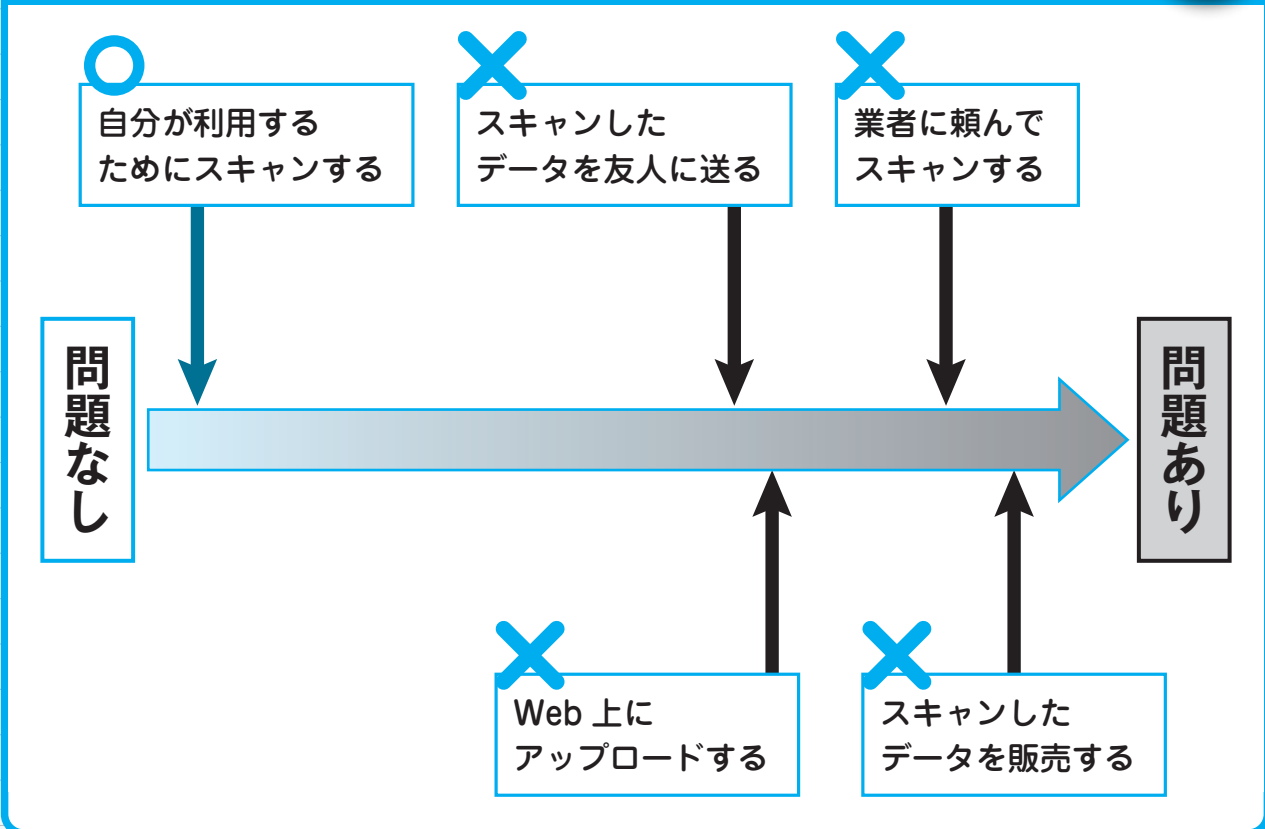
「自炊」とは自分が所有している本や雑誌をスキャナー等で電子データ化することをいいます。

「自炊(複製)」ができる条件

「個人的に又は家庭内その他これに準ずる限られた範囲内において使用することを目的とするとき、その使用する者が複製する」場合
(著作権法第 30 条より)



上の条件と照らし合わせるとどこからが怪しい？



著作権を侵害する違法な自炊は行わないようにしましょう。

分からないことがあれば図書館までお問い合わせください。

附属図書館情報サービス係
TEL: 077-548-2080
E-mail: hqjouser@belle.shiga-med.ac.jp

新任教員
紹介

内科学講座 (呼吸器)



准教授

中野恭幸

平成26年6月1日付けで、滋賀医科大学内科学講座(呼吸器)准教授を拝命いたしました。

私は大阪で育ち、高校卒業後は京都大学医学部に入学。大学では医学部ラグビー部所属でした。滋賀医大のラグビー部とは何度も試合をしたことをよく覚えています。大学卒業後は京都大学胸部疾患研究所理学呼吸器科に入局し、その後、大阪の北野病院での勤務を経て、京都大学大学院に進学しました。大学院では定量的CT解析の研究を行っていました。ふとした事から、大学院在学中に留学が決まり、4年生の途中でバンクーバー(カナダ)のブリティッシュ・コロンビア大学に留学しました。途中、大学院卒業・医学博士取得などをはさみながら、留学先でも定量的CT解析の研究を続けました。留学先で研究のおもしろさを知り、4年間の留学後、京都大学に戻りました。その後、滋賀医大内科学講座の堀江 稔教授に声をかけていただき、平成15年2月に滋賀医大に着任いたしました。

私の着任する約1年前の平成14年4月に、それまでの第一内科は診療科として循環器内科と呼吸器内科に分離していました。私に期待されていたことは、呼吸器内科の臨床を立ち上げることでした。外来、入院、スタッフ集め、研修医の勧誘など行う事は沢山ありました。滋賀医大に着任以来11年間に過ぎ、現在、大学の呼吸器内科は、スタッフ4名、特任助教2名など計17名を数えるようになりました。11年前の状況を考えると夢のようです。研究に関しては、時間不足で十分に行えないことも多々ありましたが、平成17年には第42回エルウィン・フォン・ベルツ賞の1等賞を受賞いたしました。私の専門分野は慢性閉塞性肺疾患(COPD)を中心とした定量的CT解析ですが、最近ではこのニッチな研究領域も少しは認められるようになり、日本呼吸器学会のCOPDガイドライン作成委員の一員としてガイドライン執筆にも関わりました。また、大学においては滋賀医大の呼吸器内科としては初の博士号取得者を指導する事もできました。

滋賀医大における他の仕事としては、附属病院に感染制御部を創設し、ノロウイルスによる病棟閉鎖や病院職員・学生の結核発症などにも対応して参りました。院内感染対策に関しても、非常に良い勉強をさせていただいたと思っています。

大学の呼吸器内科に少しは人が増えてきたとはいえ、県内全体を見渡したときには、まだまだ呼吸器内科医師が不足しています。今後、ひとりでも多くの呼吸器内科医が滋賀医大から育つよう、また滋賀医科大学の一層の発展のために努力して参りますので、今後ともご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。

経歴

1989年 3月	京都大学医学部卒業	2002年 9月	京都大学医学部附属病院 呼吸器内科 医員
1989年 6月	京都大学胸部疾患研究所附属病院 理学呼吸器科 研修医	2003年 2月	滋賀医科大学 呼吸器内科 助手
1990年 6月	(財)田附興風会医学研究所 北野病院 内科 研修医・医員	2005年10月	滋賀医科大学 呼吸器内科 講師(呼吸器内科長)
1995年 4月	京都大学大学院 医学研究科博士課程入学	2007年10月	滋賀医科大学 呼吸器内科 講師・病院教授(呼吸器内科長)
1998年 9月	University of British Columbia (Vancouver, Canada) Post-doctoral fellow・Research associate	2008年 6月	滋賀医科大学 附属病院 感染制御部長(兼任)
1999年 3月	京都大学大学院 医学研究科博士課程修了・医学博士(京都大学)	2014年 6月	滋賀医科大学 内科学講座(呼吸器)准教授・病院教授(呼吸器内科長)

生化学・分子生物学講座 (再生・修復医学部門)



准教授

寺島 智也

2014年7月1日付けで、滋賀医科大学学生化学・分子生物学講座(再生・修復医学部門)准教授を拝命致しました。私は滋賀医科大学16期生で、入学以来滋賀医科大学とは(途中に留学などありますが)足掛け25年のお付き合いになります。今後の大学の発展に貢献できればと存じます。皆様、どうか宜しくお願ひ申し上げます。

私は1996年に滋賀医科大学卒業後、学生時代より興味を持っておりました神経領域の診療を担当する当時の第三内科で初期研修を行いました。その後、すぐに本学大学院に進学し、神経内科の診療に携わりながら、研究に従事する日々を送りました。大学院時代は、末梢神経再生や遺伝性神経変性疾患に関わる研究に従事し、その頃より、神経難病への再生医療や遺伝子治療に強い興味を示す様になりました。学位取得後は、臨床経験を積み、神経内科専門医を取得し、次の目標として研究留学を希望していた私は、アメリカ留学より帰国されたばかりの小島秀人

教授と本学にて再会致しました。小島秀人教授は、隣島再生の遺伝子治療にて素晴らしい研究成果を挙げられておられ、その時に用いられた画期的な次世代型ウイルスベクターに私はすっかり魅了されてしまいました。何とでもこのベクターを神経疾患の治療に応用したいと考えた私は、小島教授よりペイラー医科大学をご紹介いただき、3年9か月の研究留学にて、このベクターを神経細胞標的化するものへと改変することに成功しました。また、帰国後は、本学神経内科に戻り、ウイルスベクターだけでなく、幅広く分子治療や細胞治療の手法を取り入れ、神経変性疾患や神経疼痛への再生医療を目指した研究に従事してまいりました。しかし、日々の診療で、神経難病や神経疼痛に悩まされておられる患者様を診療することは数多く、再生医療に対する私の思いは益々強いものとなり、次世代への再生医療技術の開発や臨床応用を目指したトランスレーショナル・リサーチの分野で仕事がしたいと思うようになり、現在に至ります。上述のように考えていた私にとって、この度の拝命は大変有難いことであり心より感謝しております。

神経分野に限らず、幅広い領域で、難治性疾患と向き合われている先生方やエネルギーあふれる学生の皆さんとともに、新しい研究や医療の開発に携わり、滋賀医科大学より世界に発信できる再生医療が実現することを夢見て、日々精進したいと存じます。皆様の温かい御指導および御鞭撻を賜れば幸いに存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

経歴

- | | | | |
|----------|-----------------------|----------|-----------------------------------|
| 1996年 3月 | 滋賀医科大学医学部医学科卒業 | 2003年 4月 | 滋賀医科大学 神経内科 医員 |
| 1996年 5月 | 滋賀医科大学第三内科 研修医 | 2005年 4月 | 米国ペイラー医科大学 研究員 |
| 1997年 6月 | 大阪厚生年金病院 研修医 | 2009年 2月 | 滋賀医科大学 神経内科 助教 |
| 1998年 4月 | 滋賀医科大学大学院医学系研究科博士課程入学 | 2014年 7月 | 滋賀医科大学 生化学・分子生物学講座(再生・修復医学部門) 准教授 |
| 2002年 3月 | 滋賀医科大学大学院医学系研究科博士課程修了 | | |
| 2002年 4月 | 長浜赤十字病院 神経内科 医師 | | |

泌尿器科学講座



准教授

成田 充弘

2014年7月1日付けで泌尿器科学講座の准教授を拝命いたしました。私は大阪市の出身で、高校卒業後2年間の浪人生活を経て滋賀医科大学に入学しました。それ以来今日までほぼ滋賀県に在住しており、生まれ育った大阪より滋賀での生活の方が10年以上も長くなり、今では完全に滋賀県人と化しています。

当時の滋賀医大は古き良き?時代、言い換えれば放任主義、すなわちほったらかしの時代であり、授業にもあまり出席せず、所属していた準硬式野球部で練習・試合に明け暮れていたように思い出されます。

1989年に滋賀医科大学を卒業後、決定的な理由はなぜか思い出せないのですが、友吉唯夫名誉教授の系統講義にわずかししか出席していないにもかかわらず、泌尿器科学講座に入局しました。その年は他大学からの入局者もあり、5人が入局した夢のような時代なのですが、その内1人は麻酔科にローテーターとして半年間研修することとなり、ジャンケンの結果私が最初に麻酔科にお世話になりました。泌尿器科より先にまさに全身管理である麻酔科で研修できたことは、臨床医としての大きな糧となりました。

その後、泌尿器科に戻り今日まで臨床を中心と

して仕事をしてきましたが、研修医時代は尿路結石に対する開放手術が内視鏡手術や体外衝撃波破碎に移行した時期で、現在の主流である低侵襲手術が走り出した時代でした。現在私が専門としている腹腔鏡下手術が卒後10年ぐらいの時から普及し始め、私が大学に戻る少し前の今から13-4年ぐらい前から滋賀医大でも本格的に導入を開始し、私自身うまくその流れに乗ることができました。2005年から始まった泌尿器腹腔鏡技術認定制度ですが、岡田裕作前教授のご配慮もあり、2007年に学内講師の影山進先生と一緒に滋賀医大最初の認定医をいただくことができました。それ以後は毎年着実に合格者を輩出することができております。昨年、その認定制度の核審査員である河内明宏教授がご就任されたことで、今後の若手医師にとってはよりよい技術認定に向けての研修体制が確立されたと考えております。

そして、次の波としてda Vinci surgical systemによるロボット支援手術の導入が始まりました。2011年に関連病院である宇治徳洲会病院での導入が決定し、好運にもそれに中心的に携わることになりました。2012年4月には前立腺癌に対するロボット支援前立腺全摘除術が保険収載となり、順調に症例数を重ねることができました。昨年5月に滋賀医大でも導入されましたが、それまでの経験をうまく生かすことで、導入初期から安定した成績で滑り出すことができ、巡り合わせのよさを感じています。河内教授ご就任後は病院執行部の多大なご協力のおかげもあり、先進医療を目指した腎部分切除術や膀胱全摘除術にも適応を広めています。

以上、時代の流れや巡り合わせなどの運に恵まれた経歴だと感謝していますが、それらを少しでも生かすべく、今後の私に与えられた使命は、安全かつ低侵襲な治療をクオリティ高く提供できるように研鑽を重ねていくことと、それを次世代にうまく継承していくことだと考えています。皆様には今後とも暖かいご指導ご支援をいただければ幸いです。よろしくごお願い申し上げます。

経歴

1989年 3月 滋賀医科大学医学部卒業
1989年 6月 滋賀医科大学附属病院 研修医 (泌尿器科)
1991年 1月 弥栄町国民健康保険病院 泌尿器科医員
1993年 4月 京都武田病院 泌尿器科医長
1994年 4月 滋賀医科大学 泌尿器科 助手

1996年 4月 社会保険滋賀病院 泌尿器科医長
2003年 4月 滋賀医科大学 泌尿器科 助手
2006年 3月 滋賀医科大学 泌尿器科 講師
2011年 7月 滋賀医科大学 附属病院 病院教授
2014年 7月 滋賀医科大学 泌尿器科学講座 准教授

外科学講座 (消化器外科、乳腺・一般外科)



教授
谷 真 至

2014年8月1日付で、滋賀医科大学外科学講座(消化器外科、乳腺・一般外科)教授を拝命いたしました。大同禮次郎教授、小玉正智教授、谷 徹教授ならびに講座の先生方が、築きあげてこられた素晴らしい消化器外科、乳腺・一般外科教室を引き継ぐにあたり、その重責に身の引き締まる思いを日々感じております。大学外科学講座として、「教育」「研究」「診療」「社会貢献」「国際化」の推進に取り組む所存です。

私は和歌山県立医科大学の医学生時代、ヨット部に所属し、西医体優勝を目標に土曜日・日曜日を問わず日々練習でした。この度、ご縁があって、日本一の琵琶湖の見える滋賀医科大学で勤務できることは、和歌浦で長時間過ごした私にとっては非常に嬉しいものとなっております。

その後、1987年(昭和62年)に和歌山県立医科大学を卒業し、大学の初期研修を終え、和歌山県内の4つの公的病院で勤務し消化管外科や救急外科、ならびに地域医療を学ばせていただきました。そして、1999年に大学へ帰学して、現在の肝胆膵領域を専門とするようになりました。とくに、肝胆膵領域の臨床研究に積極的に取り組んでまいりました。臨床研究、その中でも無作為化比較試験はエビデンスレベルの高い試験ですが、和歌山県立医

科大学は滋賀医科大学と同様、単科の医科大学であり、研究の立案から解析に至るまで、すなわち臨床研究のスタートからゴールまでの各ステップすべてに専門家がいらっしゃるわけではなく、複数の試験を通じて全過程において経験できたことが私自身の大きな財産になったのではないかと感じています。

その中で、とくに膵頭十二指腸切除術に関する臨床試験では、primary endpoint の設定や症例数の設定の重要性、自分たちが考えた仮説はそれなりに文献等を精査し練りに練ったはずなのに、仮説通りの結果が得られないなど、様々な苦難にも直面しましたが、仮説通りの結果が得られないからこそ臨床試験を行う意義があり、臨床家としてもそこに面白さを見出すことができます。臨床研究を進めるコツは何かと訊かれれば、それは「熱い意志と固い意志である」と答えたいと思います。自分たちが日頃から感じている疑問点を解決しようという熱い気持ちで一心不乱にプロトコルを作成し、全例臨床試験に参加してやり通すという、菌を食いしばって遂行する気持ちで臨めば、自ずから、いい結果が出てくると信じています。

外科学講座を含め、滋賀医科大学の発展には、やはり次世代を担う若い医師の育成に尽きると思います。昨今、外科医不足がうたわれております。腹腔鏡手術ひとつを見てもわかるように、外科学の発達は非常に著しい現状があります。ともすれば華やかな手術手技だけに目を奪われがちですが、外科学がどのようにして進歩してきたかを熟考すれば、科学のころ・リサーチマインドが重要であることが明らかです。「academic surgeon」「scientific surgeon」を一人でも多く増やし、「なぜ」「どうして」という素直な気持ちと外科学の急速な進歩に対する「柔軟性」を大事にしたいと考えています。また、外科学の発展には外科の力だけでなく、消化器内科や麻酔科・集中治療部・化学療法部をはじめとする各部門の医師ならびにメディカル・スタッフを含めた大学としての総合力が必要です。輝ける滋賀医科大学外科学講座となるため、今まで以上の更なるご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

経歴

1987年 3月	和歌山県立医科大学 卒業	1995年 4月	国保那賀病院外科 医長
1987年 6月	和歌山県立医科大学附属病院 研修医	1999年 2月	和歌山県立医科大学外科学第2講座 助手
1989年 4月	国保日高総合病院消化器外科 医員	2003年 8月	和歌山県立医科大学外科学第2講座 講師
1991年 6月	和歌山県立医科大学 外科学講座消化器部門 助手	2006年 7月	USA Johns Hopkins 大学外科 visiting fellow (県費留学生) 留学
1992年 4月	国保野上厚生総合病院 外科 医員	2013年 1月	和歌山県立医科大学外科学第2講座 准教授
1993年 10月	国立南和歌山病院外科 (厚生技官)	2014年 8月	滋賀医科大学、外科学講座(消化器、乳腺・一般外科) 教授
1993年 10月	和歌山県立医科大学 博士研究員(外科学(2))		

キャンパス ライフ

海外自主研修

ジョンズ・ホプキンス 大学での8週間

医学科第4学年
小田垣 彩花

8月3日～9月26日の8週間、米国 Johns Hopkins University (以下 JHU) の Dr. Pletnikov の研究室にお世話になりました。研究室は病院内にあり、ここでは統合失調症の原因遺伝子である DISC1 を中心に、精神疾患、神経疾患についての基礎研究が行われていました。研修では毎日の研究補助に加えて、週1回ずつのラボミーティング・部門ミーティングへの出席、精神科の round への参加、精神科の教授との面談を行いました。

研究補助としては、前半4週間はテクニシャンの Xia さんについて、マウスの遺伝子型を調べる genotyping (DNA 抽出、PCR、電気泳動) や、動物舎でのマウスの管理などを行いました。たいへん速く正確な技術をお持ちの Xia さんのもと、手技の基本を学び、英語のプロトコルにも慣れる



ジョンズ・ホプキンス大学病院



実験中の様子

ことができました。genotyping は一人でできるようになり、頼まれる度にやっていました。

後半4週間は、ポストドクの Yan さんについて、Western blot をメインに、他には Protein assay やマウスの脳の解剖、免疫染色などを行いました。教えていただいて私がある程度一人で実験ができるようになってからは、独立して作業することも増えました。DISC1 タンパク質の細胞内の局在について興味深い結果がでたときには、ラボミーティングで発表させていただく機会もありました。学内の小島先生のもとで英語ミーティングをした経験が役に立ちました。また、JHU の学部生がときどき研究室に来ており、一緒に働くことがありましたが、その時はなんと私が教える側となり、未経験の学生に教える難しさを実感するとともに、それまでたくさん人から教えていただいたことに感謝しました。

期間全体を通して、研修生としてどのように振る舞うべきかを日々考えて実践したことが一番の学びとなりました。最初の方は手持ち無沙汰な時間も多く、どうすれば周りからもっと教えていただけるか、仕事をさせてもらえるかが自分の課題でした。やることがあまり無い時には、どんな雑用でもやろう、何でも見学させてもらおうという気持ちで過ごし、やることができてからは失敗しないようにとても慎重に仕事をしました。それでも失敗するときはするのですが、こうした積極的な姿勢は周りに評価していただけたと思います。研修の最後にはラボの farewell lunch を開催して



研究室のスタッフと
farewell lunch

ボルチモア名物オイスター



JHU フィギュアスケート部に参加

いただき、そのときにボスの Dr. Pletnikov から、
‘You are the best Japanese student in my lab!’
と書いていただいたことは心の底から嬉しいこと
でした。

2ヶ月いたので、教えてもらうだけではなく仕
事を覚えて手伝うことができ、自分としても研究
室に貢献できている気持ちがありました。人から
必要とされることが人生には必要だなあなどと改
めて思いました。また、日本で普段の生活がど
れだけ多くの人に支えられているか、そして自分
の社会的役割がある有難さを、留学に行って実感
しました。

英語に関しては、自分の英語でもわりと何と
かなるという気持ちと、一体あとどれだけ努力す
れば英語に不自由がなくなるのだろうかという途方
もない気持ちの、二つの相反する気持ちを毎日の
ように抱きました。学べば学ぶほど、この二つの
ギャップが大きくなるように思います。英語が永
遠に自分のハンデであり続けることに絶望する一
方で、ノンネイティブでもアメリカで仕事・生活
をしている人を多く目の当りにしたことは大きな
励みとなりました。努力する余地があるから人生
は面白いのでしょう。多民族から成るアメリカ社
会で、人と人を結びつけられるのは英語という共
通言語しかないのだということを感じました。

研究室がある部門には30人ほどの人がおり、
アメリカ人、中国人、ロシア人のほぼ3通りに分
けられました。公用語は英語ですが、中国語・ロ
シア語も多く話されている環境でした。多様なよ
うでだいぶ偏っていましたが、日本人は私だけで
したので、やや孤独な反面、異国感は満喫でき
ました。Dr. Pletnikov はロシア人でしたし、長
く一緒に過ごした Xia さん、Yan さんも中国人、
ロシア人だったので、アメリカにいるのに面白い

と思いました。

JHU があるボルチモアは、アメリカ国歌誕生
の地という歴史がある一方で、犯罪や中毒者が非
常に多いことでも有名な街です。私にとっては、
高級住宅地や歴史的な美しい街並みと、危険な地
域や貧しい地域が共存しているボルチモアは、良
く言えば多様性、悪く言えばアメリカ社会の格差
をはっきりと感じることのできる、興味深い街で
した。大学のシャトル、路面電車、地下鉄、バス
に乗っても、それぞれで乗客の層が違い、不思議
な感じがしました。

研修期間中はシェアハウスに住み、料理は自
分でしていました。余暇には、週末旅行でワシ
ントン DC、ニューヨーク、ボストンを訪れたり、
JHU のフィギュアスケート部に入部して練習に
参加したり、JHU や近郊にいた友人・知人に会っ
たり、機会があれば新たな友人を作ったりしてい
ました。2ヶ月という限られた時間で、新しい環
境であっても、自分が積極的になればこれだけの
ことができるのだなあと思いました。それらも全
て良い思い出です。

最後に、このような素晴らしい機会を与えてく
ださった精神医学講座の山田先生、滋賀医大の先
生方、学生課の皆様、JHU の皆様、奨学金をく
ださった滋賀医学国際協力会、富田クリニック院
長の富田先生、研修に関わってくださいました全
ての方、そしていつも支えてくれる家族に、この
場をお借りして厚くお礼を申し上げます。



精神科教授
との面談

Bangladeshでの 自主研修報告

医学科第4学年
西 明博

8月24日から9月4日の約2週間、Bangladeshで自主研修を行って参りました。そこでの辛く、楽しい研修生活について所感を交えて報告致します。

Bangladeshはインドの北に位置する人口約1億5千万人の小国です。首都のダッカは近年の爆発的な人口増加の影響もあり人で溢れかえっています。道路は車とバイクとリキシャ（三輪自転車タクシー）が好き放題駆け巡り、慢性的な道路渋滞、昼夜鳴り止まないクラクション、汚れた空気を生み出しています。インフラの整備も追いついてなく、ガタガタの道路、毎日の停電、山積されるゴミ、不衛生な水等、刺激と課題に満ち満ちた環境です。私自身、水や食物には十分気をつけたつもりでしたが、入国後3日で頻回の下痢と発熱を発症し、研修先のDr.に抗生物質を処方してもらうという始末でした。

そんな混沌の街ダッカの真っただ中にあるのが今回研修させて頂いたNational Heart



ダッカの街並



フィールドワークの様子

Foundation Hospital and Research Institute（以下NHF）です。循環器疾患の治療と研究に特化した病院で、公衆衛生学部門では特にタバコと循環器疾患予防に関する疫学研究に注力しています。Bangladeshでは通常の紙巻きタバコに加えて噛みタバコが流通しています。噛みタバコは紙巻きタバコと同様依存性が高く、頭頸部がん、食道がんおよび膀胱がんのほか、多くの口腔疾患を引き起こします。Bangladeshではその噛みタバコの使用、特に女性における使用率の増加が問題となっています。そこで私は女性の喫煙に対する意識を探ることをテーマに設定し、聞き取り調査を実施しました。

具体的には、まず調査に用いる質問票を作成しました。全くの白紙の状態からのスタートなので、過去の文献やNHFの方々のアドバイス、自身のアイデアを織り交ぜつつ、一から質問票を作成しました。その後はフィールドワークで、実際に都市部30人、田舎30人の計60人の女性の家庭を訪れ、インタビューを行いました。もちろん現地の女性は英語を話さない方が大半なので、実際のインタビュー手順は、私が英語で質問→NHFのスタッフがベンガル語に通訳→回答者がベンガル語で回答→NHFのスタッフが英語に通訳、という煩雑なものでした。最後に得られた回答を集計し、年代、居住地域、教育レベル、経済レベル毎に層別解析し、NHFの方々とディスカッションを行い、考察しました。結果的には計画段階での調査対象の設定において検討が足らず、期待していたような調査結果が得られず、悔しさが残る調査となりました。

しかし、この調査を通じて都会、農村、高級

住宅街、スラム街など様々な場所を訪れ、現地の人々の生活に触れられたことはとても良い経験でした。高い志で自国のために直向きに働く人々に刺激され、子ども達の輝くような笑顔に癒され、農村の美しい原風景に心を洗われました。一方で、母国語を話せるが読めない大人、路上で野良犬と寝ている子ども、身体の一部が欠けている物乞い、といったシビアな現実も当たり前のように転がっていました。そんな陽と陰のコントラストの大きさを肌で感じ、もやもや考える日々でした。

またこの自主研修は Bangladesh のことだけでなく、自身に足りないものについても考える良い機会となりました。NHF での研修にはあらかじめ用意されたプログラムはなく、自身で興味のあるテーマを設定し、スタッフの方々の全力のサポートのもと研究を行えます。言い換えれば強い能動性が求められる研修です。もちろんできること、できないことはありますが、

まずは自分で考えて、希望を伝えないと何も始まりません。「この2週間でどんな研究をしたいのか。聞き取り調査をするのなら、どんな層を対象に、何例集めて、何を聞いて、そこから何を知りたいのか」、それらを考えて、言葉にして伝える作業は、受け身で学ぶスタイルに慣れきった私にはかなりのストレスでした。海外で働く、若しくは海外と働くことを視野に入れる場合、能動性と積極性を持つことは必要不可欠だと感じました。

わずか2週間足らずの期間でしたが、刺激的ではる苦く、本当に内容の濃い自主研修となりました。私を Bangladesh に送り出して下さった本学社会医学講座公衆衛生学部門の皆様、研修を受け入れ研究・観光・健康と全てをサポートして下さいました NHF の皆様、苦楽を共にした盟友である藤原稔朗君、そして聞き取り調査に協力して下さいました Bangladesh の皆様に心より感謝致します。



現地の子どもたち



フィールドワークの様子



お世話になった方たちと記念撮影

マレーシア国民大学 での自主研修

医学科第4学年
宗像 潤

2014年8月25日から9月5日の2週間、マレーシアクアラルンプールに位置するマレーシア国民大学にて自主研修を行いました。マレーシアは東南アジアのマレー半島南部とボルネオ島北部に位置する国です。日本よりかなり南に位置するためにとて暑くというイメージを持っていましたが、日差しはやや強いもののそれほど暑く感じず過ごしやすい環境でした。マレーシアは多民族国家であり、マレー系・インド系・中華系の人々が共に暮らしています。宗教についても仏教・イスラム教・ヒンドゥー教などいくつかの宗教が混在していて、本当にいろいろな人々がいました。

今回マレーシア滞在中にお世話になったのは、クアラルンプールにあるマレーシア国民大学(UKM)のemergency departmentとtissue engineering departmentです。この部門以外にも大学での研修中はUKMの4年生の学生に毎日案内をしていただき、非常に快適な研修期間を過ごすことができました。大学での研修が無い日にも大学のほうに観光など予定を組んでいただき、本当に大学を挙げてのおもてなしをしていただきました。

今回マレーシアへの自主研修は相浦教授の講座から参加させていただきました。マレーシアの気候は日本と違い熱帯の気候であり日本ではなかなか見られない症例が多くあるのではないかと、マレーシアは多民族国家であるので複数の宗教に対する医療はどのようになっているのかと思いマレーシアを選択しました。このマレーシアでの自主研修は昨年からの設置されたコースなのですが、昨年行かれた先輩方の評判が良かったこともマレーシアを選んだ理由の一つです。

私は第一週を救急部門で過ごしました。偶然



救急での写真

にもマレーシアで実習を行っている時に日本で Dengue 熱が発見されたようですが、マレーシアは熱帯の気候ということもあり救急で実習を行っている間、毎日のように Dengue 熱で救急に運ばれてきている人がいました。日本の医学教育は6年間かけて行われますが、マレーシアでは医学教育が5年間で行われるため、私たちと同じ4年生の現地の学生はもうすでに臨床実習を行っていました。正直なところ、日本でまだ臨床実習を行っていない私たちにとっては非常に高度なことが多かったです。例えば、実際に救急に運ばれてきた患者さんに対しての採血は現地の4年生はすでに行えるのですが、もちろん日本では行うことはできません。動脈血・静脈血の採血、胸骨圧迫など日本の4年生では経験できないことをすることができ、非常に刺激的で充実した一週間でした。

第二週は非常に短い間でしたが再生医療部門に配属されました。この再生医療部門では多岐にわたる臓器の再生に関する研究がされており、その研究の手技について学びました。また最終日には、この配属の間に学んだことについてプレゼンテーションを行いました。この部門の方々



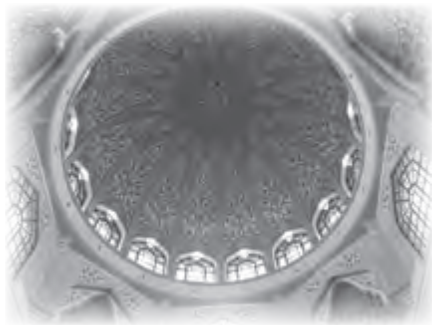
食堂の様子



日の出の山のぼり



ツインタワー前
集合写真



モスク内部



パレード

がポスター発表の直前であったということもあり、この部門で行われている多くの研究について解説してもらえなど再生医療についての理解を深めることもできました。この配属では実験手技の習得以外にも院生との交流やプレゼンテーションなどを通して英語でのコミュニケーションを学びました。

マレーシア滞在中は研修以外にも UKM に様々な予定を組んで頂きました。第一週と第二週の間には3日間の休日があったのですが、毎日現地の4年生の学生に案内をしてもらいました。クアラルンプールで有名な山へ登って日の出を見たり、マレーシアの独立記念パレードを見学したり、ツインタワーなどクアラルンプール市内を観光に連れて回っていただいたりと休日なのに本当に休む暇もないぐらい充実した休日を過ごしました。

この観光の時にマレーシアの様々な文化にふれることができました。観光ではクアラルンプール市街地で昼食をとることがあったのですが、マレーシアは多民族国家なのでマレー料理・インド料理・中華料理と様々なジャンルの料理がありました。マレー料理の辛さ・刺激にはお腹を壊す人もいましたが、味は基本的に日本人好みのものが多く非常においしかったです。また、

イスラム教の人は豚肉を食べることができません。日本ではイスラム教の人がまだまだ少ないため意識したことがありませんでしたが、マレーシアではイスラム教の人が中華系のレストランで食べているところは見かけませんでした。その他にも、オールドモスクなどイスラムを感じるられる建築物もあり、文化の違いを感じました。

今回私たちはマレーシアでの自主研修2週間を非常に快適に終えることができました。UKM との連絡をしてくださった相浦教授、現地での配属先でお世話をしてくださった先生方、また毎日相手をしてくださった学生の皆様の助けがあってこそ無事に充実した自主研修を行うことができたのだと思います。この自主研修に関わってくださったすべての皆様に感謝を申し上げます。



空港にてお別れ

チョーライ病院 自主研修体験記

医学科第4学年
久保田 浩之

2014年8月25日から9月5日までの2週間、ベトナム社会主義共和国ホーチミン市にある、国立チョーライ病院にて自主研修の機会をいただきました。自主研修の様子について報告させていただきます。

研修先をベトナムにした理由は二つあります。一つは、経済発展を続けるベトナムが社会保障制度を整備しようとしていることから、先進国の課題を踏まえてどのような制度をつくるのかということに関心があったこと、もう一つは、途上国の医療に関心があり、将来海外の臨床現場で働きたいという希望があるため、海外での臨床現場を体験する絶好の機会であったからです。

チョーライ病院は、ベトナム国内に三つある、ベトナム保健省直轄の拠点病院の一つです。ベッド数は1700床もあり、ベトナム最大規模の病院です。チョーライ病院と日本との関係は深く、ベトナムがまだ南北に分かれて戦っていた頃の1960年代から、日本の技術協力が開始されました。11階建ての病院本館建物は、1971年から74年にかけての、日本からの無償資金援助を利用して建設されました。それ以降も、資金、技術両面の援助は現在まで続き、2014年現在でも、医療人材育成プログラムなど、チョーライ病院を拠点とした技術援助が行われています。また、滋賀医大とも関係が深く、滋賀医大で研究し学位を取られた先生や看護師の方、滋賀医大に来たことがある、あるいはこれから来る予定がある先生方に、数多く出会うことができました。

チョーライ病院での実習は、診療科を自由に選ぶことができました。私は、Tropical disease department、Cardiology department、Medical social affair unit、Emergency department をまわりました。



朝チョーライ病院へと向かう途中



チョーライ病院を正面から眺める

Tropical departmentでは、マラリア、デング熱や類鼻疽など日本にはなかなかない感染症の治療を見ることができました。他にも、脳炎や天疱瘡、ステイーブンジョンソン症候群の患者さんも入院されていました。特にへび咬傷の患者さんの多さが印象に残りました。ベトナムには、毒をもったへびが30種以上生息しており、年間3万人以上の方が受傷されています。チョーライ病院でも、年間500人以上の方がへび咬傷で入院されています。出血毒素の症状と抗毒素を用いた治療を実際に見ることができました。

循環器内科は、循環器関係の疾患が現在のベトナムにおいて死因の1位を占めていることから、この国のヘルスプロモーションに関心があったため、まわることにしました。心臓弁膜症と急性冠症候群について詳しく解説していただき、患者さんに聴診をさせていただきました。多くの特徴的な心雑音を、実際に聴診することができました。

Medical social affair unitでは、ベトナムの医療保険制度を補完し、医療費を払えない患者さんに対して経済的に支援する制度についてお話をうかがいました。この部署は、経済的に余裕のある方からの寄付金で運用され、治療費を負担できない方に対する援助を行っていました。国全体として経済発展しているとはいっても、地域の格差は



チョロン地区にあるビンタイ市場



メコン川クルーズにて



ホーチミン市から60kmほど離れたクチ地区に残る、南ベトナム人民解放戦線の拠点であったトンネル跡

大きく、最も豊かな地域の一つであるホーチミン市と比べて、平均賃金で10倍以上差がついている地域もあります。たとえ医療保険に加入していても、必要な治療の費用を負担できない方も多くいらっしゃいます。普通に実習しているだけではわからない、患者さんの生活の背景を垣間見ることができました。

Emergency departmentでは、急患患者のトリアージの様子を見ることができました。ベトナムでは交通事故が非常に多く、死因の約7%を占めています。急患が増える夕方になると、Emergency departmentは、患者を乗せたストレッチャーで一杯になります。交通事故で受傷し、血を流している方も多く含まれていました。緊急度を判断し、障害部位を見極め、ほかの診療科へバトタッチしていく現場を見ることができました。

ところで、チョーライ病院はホーチミン医科薬科大学の実習病院になっています。そのため、実習もホーチミン医科薬科大学の医学生達に混じって行うことになります。他にも、世界中から医療従事者の実習や見学を受け入れているため、欧米の医学生も長期休暇を利用してたくさん研修に来ていました。毎日ベトナムや欧米の医学生と交流する機会があり、大変いい刺激になりました。

これからチョーライ病院での自主研修を希望する方にアドバイスするとすれば、一つ目は、実習期間の長さは融通がきくということです。例えば1か月滞在することも可能なので、2週間という期間にとらわれず、自由に期間を設定すればいいと思います。二つ目は、一つの診療科を最低1週間くらいいたほうがいいことです。私は、公衆衛生的な視点にも関心があったため、多くの診療科を駆け足でまわる日程にしましたが、病棟で出会

う数々の症例についてじっくり学習するには、一つの診療科に1週間はいたほうが良いと感じました。チョーライ病院では、実習の日程、診療科について自由に選択できるので、海外、特に途上国の診療現場をのぞいてみたい方、いくつかの診療科について、学びたいテーマがある方に特にお勧めです。

なお、ベトナム料理は日本人の口に合い、特にホーチミン市は庶民的なお店から洗練されたレストランまでたくさんお店があって飽きません。ベトナム以外の世界各国の料理店も集まっており、食事の満足度は非常に高かったです。観光スポットも多く、休日に観光も楽しめますので、そういう点でもお勧めです。

今回このような貴重な学びの機会を得ることができたのは、三浦先生、相浦先生、公衆衛生学講座大学院生のHoさん、チョーライ病院研修担当のPhuong先生、Bich先生、看護師のHienさん、他各部署でお世話になった方々、チョーライ病院の患者の皆様、JICA職員の高島さん、そして財政的に支えた下さった和仁会の皆様のご協力のおかげです。大変お世話になりました。ありがとうございました。



修了証書、Bich先生、Hienさんと共に

平成26年度滋賀医科大学奨学金奨学生の決定

滋賀医科大学奨学金は、前年度の成績が優秀な第2学年以上の学部学生を各学科各学年から1名ずつ選出し、月額5万円の奨学金を1年間給付しているもので、わかあゆ夢基金および学生奨学支援助成金（企業、病院、個人からのご寄付）を財源としています。

平成26年度の奨学生は以下のとおり決定し、去る6月25日に中会議室において授与式を行いました。

平成26年度滋賀医科大学奨学金奨学生

医学科第2学年	牧野 愛	医学科第6学年	藤井 彰夫
医学科第3学年	鈴江 隆志	看護学科第2学年	竹内 美佳
医学科第4学年	西 明博	看護学科第3学年	高谷 知江
医学科第5学年	横江 真弥	看護学科第4学年	岩本 悠花



奨学生からのひとこと

医学科第2学年 牧野 愛

すばらしい評価をしていただき光栄に思います。
貴重な時間を割いて質問に答えてくださった先生方、ともに真摯に学業に取り組み私を励ましてくれた友人たち、どんなときも見守ってくれた家族、そして一人一人の学生に配慮が行き届いた滋賀医科大学の教育制度に心から感謝しております。
これからも命を預かる大切な仕事に向かって、さまざまなことを学び成長していきたいと思っております。

医学科第6学年 藤井 彰夫

このたび、本奨学金の奨学生に選ばれたことを大変光栄に思います。反省する点は多々ありましたが、手探りしながら臨床実習の中で自分のできることをやってきました。その姿勢に対して一定の評価を頂けたのは大変誇らしく、将来への大きな励みとなりました。これからも様々な課題が押し寄せることと思いますが、一つ一つ、精一杯取り組んで行きたいと思っております。
このような機会を与えてくださった方々に感謝申し上げます。また、これからも変わらぬご指導を頂けますよう宜しくお願い申し上げます。

医学科第3学年 鈴江 隆志

このたび、滋賀医科大学奨学金奨学生に選出いただき、誠に光栄に思います。入学当初からこの大学で学べることは何でも貪欲に吸収しようと考え、自然科学・人文科学・医療社会のあり方といった医学生に必要な基礎から、滋賀の地域色（「地域論」）まで一年半かけて勉強しました。第2学年後期からは専門課程に入り、解剖、生理学、生化学をはじめとする科目に懸命に取り組みました。今回の結果はこれまでの積み重ねの成果だと考えています。支えてくださった先生方、家族、周りの仲間へ感謝しています。
頂いた奨学金は、医学書の購入や海外自主研修などの資金として用いる予定です。患者さんを救う信念を持ち、医療・医学の発展に寄与できる見識と実力を持った医療人になるべく、今後も研鑽を続けてまいります。

看護学科第2学年 竹内 美佳

このたびはこのような奨学生としてご推薦いただいたこと、大変名誉に感じ、また背筋が伸びる思いです。
こうして滋賀医科大学で医療、看護を学ぶことができるのも、皆様のお力添えあってのことと、心より感謝いたします。
まだ夢へのスタート地点に立ったばかりですが、初心を忘れず、なお一層精進して参ります。

医学科第4学年 西 明博

このたびは奨学生に選出いただき誠にありがとうございます。
大変光栄に思うと同時に、身が引き締まる思いでいっぱいです。熱心に指導して下さった先生方、共に学び、遊び、いつも刺激を与えてくれた友人達に心より感謝いたします。
今の気持ちを忘れることなく、これから一層の向上心を持って勉学に励みます。また、知識だけの頭でっかちにならぬよう、アンテナを高く、ベクトルを外に向け、学内・学外の様々な活動に参加し、見聞を広めたいと思っております。

看護学科第3学年 高谷 知江

このたびは、滋賀医科大学奨学金奨学生に選んでいただき誠にありがとうございます。この二年間、無遅刻無欠席で勉学に取り組んできたことをこのような形で評価していただき、大変嬉しく思うと同時に、光栄に思います。私は今、助産師課程選抜試験を経て助産師課程に在籍しています。将来立派な助産師を目指して、熱意ある先生と熱心な友人達に囲まれ、切磋琢磨しながら互いを高め合う日々を過ごしています。とても良い環境で勉強させていただいていることに、本当に感謝しています。今後も、現状に満足することなく日々精進していこうと思っております。ありがとうございました。

医学科第5学年 横江 真弥

このたび、滋賀医科大学奨学金奨学生に選ばれましたことを、大変嬉しく思います。それと同時に、より一層の努力を重ねていかなければならないという思いを新たにされた次第です。
第5学年になって4月から臨床実習が始まり、実際に患者さんと接するようになってからは毎日が勉強であり、今までのような与えられる知識を吸収するだけの姿勢ではなく、自ら積極的に課題を見つけて解決していく姿勢が必要であることを痛感しました。そして、奨学生に選ばれたことにより、今まで以上に積極的かつ使命感を持って学び進めていく決意を新たにいたしました。地域、そして世界に貢献できる医師になれるよう、さらに努力していきたいと思っております。

看護学科第4学年 岩本 悠花

このたびは、奨学生として選んでいただき、大変嬉しく思います。
滋賀医科大学に入学し、3年間、臨床実習中に受け持たせていただいた患者さんをはじめ、ご指導いただいた病院関係の皆様や先生方、友人、家族の支えがあり、このように勉学に励むことができました。
学生生活も残りわずかとなりましたが、今後も自分を支えてくださる方々に感謝しながら、目指す看護師像に一歩でも近づけるよう、精一杯努力していきたいと思っております。本当にありがとうございました。

ヨット部による追悼慰霊式

本学ヨット部は、平成4年9月11日(金)午後4時50分に琵琶湖で不幸にも遭難した故嶋岡秀典さんの慰霊式を、9月15日(月)の11時からクリエイティブモチベーションセンターで行いました。

嶋岡さんの御家族、塩田学長、ヨット部OBといった関係者約30名の列席があり、大学関係者の追悼の言葉が述べられた後、ヨット部主将の医学科第3学年 西藤 知城 君から、部活の安全対策に対する誓いの言葉がありました。



2014年 嶋岡さん追悼慰霊式

医学科第3学年 ヨット部主将 西藤 知城

悲しい事故から二十二年の時が経ちました。九月を迎え、慰霊碑の前に立ちますと自然の雄大さと恐ろしさを改めて感じます。

現在、ヨット部では第1学年5名、第2学年4名、第3学年4名の現役部員が活動しています。我々が日々活動している琵琶湖は多くのセーラーが集い、己の技術を高めあうことのできる素晴らしい環境です。しかし、ともすれば危険が伴い命を落としかねない危険もまた秘めています。

九月、代替わり後に練習を再開するに当たり、まず安全対策の講習会を開きました。改めて事故防止の徹底と緊急時の対策を知ることの重要性を痛感いたしました。部員それぞれが安全に対する意識を高め、正しい知識を身に付けなければなりません。

毎年、代替わり後まもなく行われるこの式は故嶋岡秀典さんを追悼するとともに、部の安

全に対する意識を再確認する場でもあります。二十二年前の事故から我々には多くのことを学ばなくてはなりません。我々は、嶋岡秀典さんのヨット部への思い、ご家族の方々の思いを真摯に受け止め、現在のヨット部があることを感謝するとともに、二度とこのような悲しい事故を起こさないことを誓います。

嶋岡秀典さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。



追悼慰霊式の様子



塩田学長による追悼の言葉



列席者による献花

アジア疫学研究センター
紹介

アジア疫学研究センターにおける疫学研究 (その 1)

— 地域疫学研究、国内共同研究、国際共同研究 —

アジア疫学研究センター 特任助教

久松隆史

本学アジア疫学研究センターは社会医学講座 公衆衛生学部門・医療統計学部門をはじめとする学内各部門と共同で、循環器疾患・生活習慣病予防のための多様な疫学研究に取り組んでいます。大規模集団を対象とする疫学研究は多大な労力・費用と長い時間を要しますが、これまで国内・国外の多くの共同研究者とともに数々

の研究を作り上げてきました (図1)。今回と今回の2回にわけて、我々が取り組んでいる疫学研究プロジェクトについてご紹介したいと思います。

今回は、滋賀県草津市一般地域住民から無作為抽出した集団において実施している地域疫学研究 (滋賀動脈硬化疫学研究 SESSA)、我が国を代表する循環器疫学コホート研究を統合した国内共同研究 EPOCH-JAPAN、日・米 (白人およびハワイ在住日系人)・韓の3カ国4集団において動脈硬化およびその関連要因を比較検討する国際共同研究 ERA-JUMP、以上3つの疫学研究について紹介します。



図1. アジア疫学研究センターを中心とする疫学研究プロジェクト

※アジア疫学研究センターパンフレットより引用

1. 地域疫学研究

滋賀動脈硬化疫学研究

Shiga Epidemiological Study of Subclinical Atherosclerosis (SESSA)

滋賀県草津市から無作為抽出された一般地域住民約1,200名において、潜在性動脈硬化および認知機能低下とその関連バイオマーカーを検討し、生活習慣病・認知症の早期発見および予防に資する知見を明らかにすることを目的とした疫学研究です。放射線科、内科、脳神経外科、分子神経科学研究センター等と共同で実施しています。平成18年から平成20年にかけてベースライン調査を行い、平成22年から追跡調査を実施しています。本研究では、CT検査による冠動脈石灰化や頸部エコーによる頸動脈内膜中膜肥厚等の潜在性動脈硬化指標の定量的測定、頭部MRIによる無症候性脳血管障害・海馬萎縮の評価、認知機能検査、腹部内臓脂肪の定量的計測、遺伝子検査、メタボローム解析、詳細な生活習慣調査（食事・睡眠・運動）等の調査が含まれており、これほど多彩なバイオマーカーを測定しているコホートは全国でも有数のものになっています。

本研究からは、潜在性動脈硬化に関連するリポ蛋白粒子数・サイズの検討 (Hisamatsu T, et al. Atherosclerosis 2014) や米国の潜在性動脈硬化コホート研究 MESA との冠動脈石灰化指数の比較 (Fujiyoshi A, et al. Am J Epidemiol 2014) 等、多くの成果を報告しています。

2. 循環器疫学コホート研究の統合データベース国内共同研究

Pooled Analyses Project of Cohort Studies of Cardiovascular Diseases Across Japan (EPOCH-JAPAN)

厚生労働省の研究班として始まった我が国を代表する14のコホート研究が参加した国内共同研究です。計20万人におよぶ本研究統合データベースはアジア疫学研究センターで管理されており、全国の共同研究者が本学に来学して、日本人の総死亡・循環器疾患死亡に関連する要因の分析を進めています。

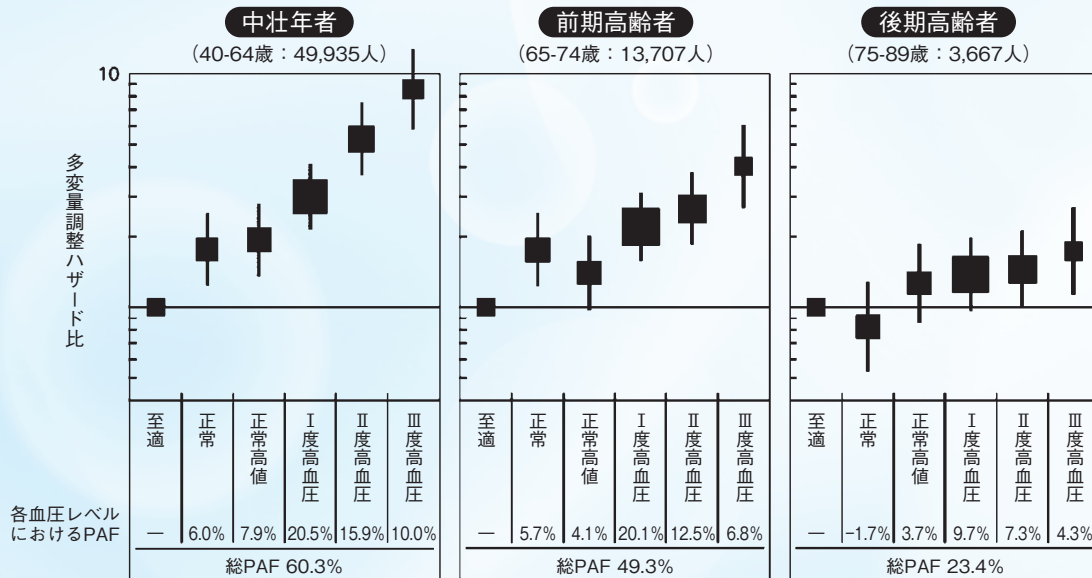
本研究からは、国内のメタ分析としては最大規模の、年齢階級別・血圧カテゴリー別にみた循環器疾患死亡との関連 (図2) が明らかとなり、日本高血圧学会ガイドラインや国の政策立案に役立っています。

3. 潜在性動脈硬化の日米比較研究

ERA JUMP (Electron-Beam Tomography and Risk Assessment among Japanese and US Men in the Post World War II Birth Cohort) Study

日本人、米国人（白人およびハワイ日系人）、韓国人の3か国4集団約1,200名において、国際的に標準化された方法を用いて、CTによる冠動脈石灰化をはじめとする潜在性動脈硬化関連指標とその危険因子を比較・評価することを目的としています。集団間の潜在性動脈硬化の違いを規定する因子を明らかにする、ピッツバーグ大学やハワイ大学との国際共同疫学研究です。

本研究における日米比較では、冠動脈石灰化指数と頸動脈内膜中膜肥厚が米国白人より日本



注1 ハザード比は年齢、性、コホート、BMI、総コレステロール値、喫煙、飲酒にて調整。
 注2 PAF (集団寄与危険割合) は集団すべてが至適血圧だった場合に予防できたと推定される死亡者の割合を示す。

Fujiyoshi A, et al. Hypertens Res 2012より作図
 高血圧治療ガイドライン2014

図2. 「年齢階級別・血圧カテゴリー別にみた循環器疾患死亡の多変量調整ハザード比」
 (EPOCH-JAPAN, 国内10コホート(男女計7万人)、平均10.2年追跡のメタ分析)

(図2説明文) 血圧と循環器疾患リスクとの関連は、中壮年者(40-64歳)、前期高齢者(65-74歳)においてほぼ対数直線的であり、年齢が若いほど傾きは強く、至適血圧のリスクが最も低いことが明らかとなった。また、集団寄与危険割合(PAF:対象者全てが至適血圧だった場合に予防できたと推定される循環器疾患死亡者の割合)も報告している。その試算では、全ての人々が至適血圧に維持されていれば壮年者(40-64歳)では約60%、前期高齢者(65-74歳)では約50%、後期高齢者(75-89歳)でも約20%の循環器疾患死亡を予防できたと推定された。

人の方がはるかに軽症であったこと (Sekikawa A, et al. Am J Epidemiol 2007)、一方、日本人よりもハワイ在住日系の方が動脈硬化は白人同様に進展していたこと (Abbott RD, et al. Am J Epidemiol 2007) 等、多くの知見を報告しています。

本稿では我々が取り組んでいる疫学研究プロジェクトのうち、地域疫学研究、国内共同研究、国際共同研究の内容およびその成果について、ご紹介しました。次号では、全国300地区からの国民代表集団の追跡により生活習慣病・健康寿命に影響を与える要因を検討している NIPPON DATA を中心にご紹介します。

国立病院機構
東近江総合医療
センターだより

東近江総合医療センター スキルスラボの開設

滋賀医科大学総合外科学講座 教授 来見良誠

(国立病院機構東近江総合医療センター 副院長)

東近江総合医療センターでは、平成26年4月にスキルスラボを開設し、学生・研修医を対象として試験運用を開始しました。8月28日に開催されました東近江総合医療センター臨床談話会において、地域の医師会に公開し、10月18日開催の東近江総合医療センター内科研修セミナーにおいて、滋賀医科大学所属の研修医に披露いたしました。開設後6か月が経過した現在、利用しやすい形にレイアウトを変更し、本格的な運用を開始しましたのでご紹介いたします。

当施設は、図書室・ロッカールーム・「スキルスラボ1」～「スキルスラボ5」の7つのエリアで構成されています。図書室には医療に関連する図書とDVDが整備されています。ロッカールームは、院外からの研修者が最大68人まで利用できるように整備され、利用者が実際のトレーニングに不要な荷物などを収納できるようになっています。シミュレーターなどは、「スキルスラボ1」～「スキルスラボ5」に設置されており、それぞれ特徴のある機能的な配置を行いました。

● スキルスラボ1 ●

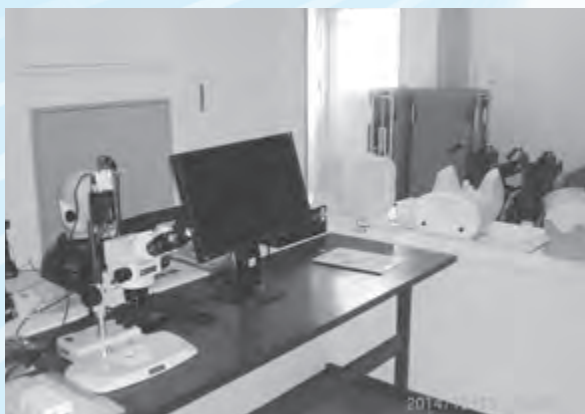
18m × 14m の広さで、当スキルスラボの中では最も大きな空間を占めています。2年前までは実際の手術室として使用されていたもので、臨場感をもたすために無影灯や空調などはそのまま残して改装しています。壁面2面を利用して部屋の両側に8台の大型シミュレーターを設置しています。内視鏡手術シミュレーター・消化管内視鏡シミュレーター・気管内視鏡シミュレーター・超音波シミュレーター・内視鏡手術トレーナーなどがあり、学生・研修医には特に人気です。他の壁面には、血管穿刺や採血用のシミュレーターが設置されています。室内の中央部分には、気管内チューブ挿管シミュレーター・縫合シミュレーターなどが設置されています。





● スキルラボ2 ●

12m × 6m の広さの部屋と前室部分で構成されており、3体の等身大の診察人体モデルがあり、呼吸音・心音などのシミュレーションが可能で、聴診技術のスキルアップを目指したトレーニングスペースとなっています。前室部分には、眼科シミュレーターと耳鼻科用診察シミュレーターも設置されています。



● スキルラボ3 ●

10m × 6m の広さで、看護師用のラボとして病室をイメージした構造になっており、2体の等身大の万能型成人実習モデルが置かれています。心電図モニターのトレーニング用の等身大の模型も置かれており、入院患者さんに必要な看護技術のスキルアップを目指したものとなっています。



● スキルラボ4 ●

10m × 6m の広さで、部屋の中央には救急患者の等身大の人体モデルタイプのシミュレーターがあり、救急初療の対応のスキルアップが可能な施設となっています。部屋の奥にあるマジックミラーの向こう側には評価者用の小部屋があり、研修者の評価ができる構造になっています。

また、研修者同士が評価できるよう診察風景が壁面に投影できるようになっており、少人数でのカンファレンスが可能でスキルアップの一助となるようになっています。



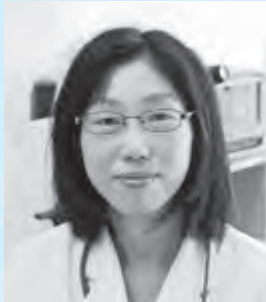
● スキルラボ5 ●

幅3m × 奥行14m の細長い通路を利用したオープンスペースとなっており、生体の模型や体内の血管モデルなどが置かれています。入場者はこの空間を必ず通過することになっており、その際に興味を持ったモデルを観察できるような構造になっています。



東近江総合医療センターのスキルラボは、職員・学生だけでなく、東近江保健医療圏の医療関係者・市民の医療技能向上のために役立ていただけるような運営を目指しています。現在のシミュレーター機器は、主に現場の状況をできるだけ忠実に再現して、実際に実施する技能の習得ができるよう作られています。道具・機器を通して伝わる触覚などは完全には再現されていません。つまり、バーチャルを主体とするシミュレーターで修得できる能力は、その医療行為の流れを主に理解するものであり、シミュレーターで体得した感覚・技能は必ずしも実際の手技に完全には当てはまりません。医療技術を習得して、それを安全・確実に実施できるようになるためには、研修者の多くの試行錯誤と努力が必要です。教習書を読んだり、シミュレーターを使ったり、映像による上手な人の手技を見たり、実際に実施してみたり、様々な観点から、重要なポイントは何かを考えながら、スキルラボの機器や資料を利用して、安全・確実に技能の上達を積極的に図っていただきたいと思います。

皮膚科の紹介



滋賀医科大学
総合外科学講座
非常勤講師

鷓飼佳子

(国立病院機構東近江総合医療
センター 皮膚科医長)
(医学科23期生・平成15年卒)

当院の皮膚科は2011年の1月に開設されました。私は2013年4月より当院に勤務しています。

皮膚は目にみえる臓器のため患者さん自身が大変気にされる分野であり、よくなっているかどうか患者さんはよくご存じです。そのためプレッシャーを感じますが、診断がついたときや治療が奏功したときの喜びは大きく、やりがいを感じながら日々仕事をしています。

東近江は皮膚科の専門医が少ない地域です。そのため、この地域の患者さんに的確な診断と治療を提供することが重要な使命と考えています。現在当院の皮膚科は一人体制ですが、滋賀医科大学皮膚科から非常勤で中西准教授、藤井紀和講師にも応援に来ていただいています。外来診療に加えて、難治症例の検討や手術の相談を行って、よりの確な診断を行えるように心がけています。

症例については多岐にわたっています。紫外線療法、炭酸ガスレーザーによる治療、ケミカルピーリング、皮膚腫瘍の切除、美白治療、陥入爪についてはワイヤー法やフェノール法も

行っています。皮膚疾患のある患者さんはとりあえず紹介いただければと思います。皮膚科だけでは手に負えない症例などについては、他科の先生方にも協力していただいて治療を行っています。一人医長体制でも今のところ大きな問題なく診療できているのは、院長、副院長をはじめとした当院の職員の方々、また田中俊宏教授をはじめとした滋賀医科大学皮膚科の先生方のご協力のお蔭です。この場をお借りして心より感謝いたします。微力ではありますが、東近江総合医療センターの発展に貢献できるように今後も精一杯努力していきたいと思っています。

院内の取り組みとしては、皮膚科が中心になって褥瘡に関わっています。看護副部長、看護師長、栄養士、薬剤師、病棟リンクナースなどで褥瘡チームを結成し、褥瘡回診を行っています。褥瘡の早期発見、早期治療を心がけています。年に1回勉強会も開催しています。

当院の特徴についてはすでに他の先生方が書かれているので割愛いたしますが、私が大変助かっているのは、当院には院内保育、病児保育があり、子供の急病時にも安心して仕事ができる点です。育児との両立で悩んでいる女医さんにも当院をおすすめしたいです。皮膚科は今年度専門医研修施設に認定されました。当院での皮膚科の研修ももちろん大歓迎ですので、希望される方は是非ご連絡下さい。お待ちしております。

眼科の紹介



滋賀医科大学
総合外科学講座
非常勤講師

須賀 美保子

(国立病院機構東近江総合医療
センター 眼科医長)

諸先生方には平素よりお世話になり大変有難うございます。東近江総合医療センター眼科の須賀美保子と申します。H23年度から須賀が赴任し、今年度から中島智子医師も赴任し、現在常勤医2人体制になっています。

手術は主に白内障手術をおこなっています。手術日は週2回で、月に2回滋賀医大から手術の手伝いに来ていただいています。

外来は眼科一般診療をおこない、硝子体手術が必要など専門性の高い疾患の場合は主に滋賀医大へ紹介させていただいています。

当院は結核病棟があるため、エタンブール視神経症の診察が以前から定期的に行われています。また土地柄か、白内障も都会よりは進行している症例が多いように思います。新病棟ができたり医師の増員などで、病院の患者さんも増えてきていると思いますが、それにつれ進行した糖尿病網膜症を診る機会も多くなってきているように思います。入院外来とも看護師さんや医療従事者の方がよくサポートしてくださるのでとても助かっています。

昨年度、眼科外来も改修がおこなわれました。眼科は器械が多いため、一時移転などの引っ越しが大変でしたが、移転後はスペースもやや増

え、それまで1診だった診察室が2診となり、より効率よく業務が行えるようになりました。

また、昨年秋からは電子カルテが導入され、眼科でも眼科部門のサブシステムを導入して活用しています。紙カルテも良いところがありますが、やはり、時間に縛られずに診療内容を閲覧できたり、予約の患者さんを前もって把握できるのは便利だと思います。電子カルテを機会に予約制も始め、当初患者さんも戸惑っておられたようですが、最近は大いぶ定着し、待ち時間の軽減に役立っているのではないかと思います。

眼科の機器ですが、病院や院長先生のご理解を得て、近年購入していただいたものが多くあります。手術室では、手術用顕微鏡や、超音波白内障手術機器が新しく変わりました。外来では、OCT（光干渉断層計）という網膜の断層像を解析する器械が導入され、加齢黄斑変性や糖尿病黄斑浮腫などの診断のために毎日のように活用しています。

至らぬところも多々あるかと思いますが、東近江の方々の眼の健康を守るために貢献できたらと考えております。今後ともよろしく願い申し上げます。



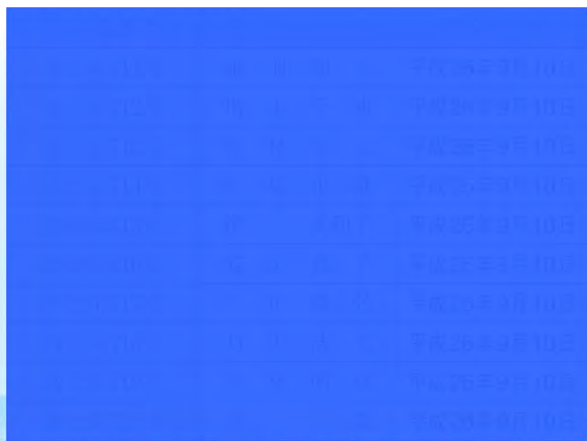
インフォメーション

平成26年度第1回学位授与式

去る10月1日(水)11時から、本学管理棟大会議室において挙行されました。



■課程博士 10名



■論文博士 5名



■修士 2名



平成26年度滋賀医科大学医学部医学科第2年次後期学士編入学並びに 平成26年度秋季大学院医学系研究科博士課程・修士課程入学宣誓式

去る10月1日（水）10時から、本学管理棟大会議室において挙行されました。



式 辞

学 長 塩 田 浩 平

本日ここに、滋賀医科大学へ学士編入学される17名、大学院医学系研究科へ入学される8名の皆さんを迎え、平成26年度滋賀医科大学医学部医学科第2年次後期学士編入学および秋季大学院医学系研究科入学宣誓式を挙行できますことを心からうれしく思います。

医学科学士編入学の皆さん、滋賀医科大学への御入学おめでとうございます。ご家族の方々にも心からお慶びを申し上げます。

皆さんは、これまでに様々な分野の勉強をされ、あるいは社会人としての経験を積まれる中で、医学を学び将来医師・医学研究者の道を歩もうと決心して、本学の学士編入学試験に合格されました。医学を志した動機や理由はさまざまでしょうが、それぞれ目的をもって医学を志された皆さんの決意に敬意を表します。

医学における学士編入学制度の主旨は、他の分野で学んだ知識や技術、あるいは社会人としての経験を医学・医療の場で活かし、医学研究や臨床に貢献していただくことであります。医師としての仕事に要求される資質は沢山あります。十分な医学的知識とそれに基づく確かな判断力、すぐれた医療技術などは言うまでもありませんが、医師

が診療の現場で患者さんに接するときには重要なのは、豊かな教養、暖かい人間味、コミュニケーション能力など、「人間力」と言ってよい大きな能力です。そのような観点からも、皆さんのこれまでの人生経験が、医学の勉強と医師になってからの実践の場で必ずや役に立つものと信じています。

いまここで皆さんが感じておられる新たな決意と将来への希望を忘れることなく、これから4年半の勉学に励んでください。医学は学ぶべきことがきわめて多く、ほとんどが必修科目で、大変忙しい学生生活となりますが、心身の健康に十分留意して医学を修得してください。また、医師となっても一生が勉強の連続ですので、自ら継続して学ぶという習慣をぜひ学生時代にしっかりと身に付けてください。

なお、専門の勉強の合間には、読書や芸術によって教養を高め、またスポーツも楽しんでください。滋賀県には、豊かな自然と歴史、それに加えて様々な新しい文化資産があります。どうか、充実した学生生活をこの滋賀医科大学で送ってください。

次に、平成26年度秋季大学院医学系研究科博士課程に入学された7名と修士課程に入学された

1名の皆さん、ご入学おめでとうございます。本学の大学院医学系研究科が秋入学を導入して今年で5年目になりますが、これまでに多くの方が大学院へ進学され、それぞれの分野で医学の研究に精進しています。今回博士課程に入学された7名の中には、新しく発足した博士課程教育リーディングプログラム「アジア非感染性疾患（NCD）超克プロジェクト」を履修される3名の留学生の方もおられます。

医学・医療の進歩は目覚ましく、疾病の原因やメカニズムが次々と解明され、新しい治療法の開発も進んでいます。基礎医学と臨床医学の間の垣根も低くなり、優れた基礎研究の成果が画期的な医薬品の開発に結びつく例も増えています。また、ロボット手術や再生医療などに代表される新しい医療も急速に進展しています。さらには、高齢化社会の到来に伴って、近い将来、国民の疾病構造や医療をとりまく環境に大きな変化が起こることから、社会医学的な研究の重要性も増しています。

皆さんは、こうした大きな進歩と変化の時代に医学や看護学の研究にたずさわって、専門分野における最先端の研究や人類社会の重要な課題を解決するための研究に従事することになります。ぜひとも新しい時代を切り拓く個性的な研究を行い、優れた成果を挙げて医学・医療の発展に寄与してください。研究は、苦難が多く、競争も激しい世界ですが、それだけにやり遂げたときには大きな達成感と喜びを得ることができます。皆さんの奮闘を期待しています。

医学の研究は、自らの研究成果が病態の解明、新しい診断や治療法の開発に結びつくという、大変やりがいのある仕事です。しかしその反面、研究者に課せられる責任は大変重く、たゆまぬ自己研鑽と高い倫理観をもつことが求められます。昨今、医学と関連分野の科学研究の現場で起こったいくつかの事例は、残念ながらこうした期待を裏切り、研究者全体の信用を傷つける結果になって

います。また、科学研究に対する社会の眼が一段と厳しくなっています。大学院時代は、研究者としての素養と研究能力を修得するためのトレーニングの期間であると同時に、科学者としての心構えを身につける、極めて重要な時間でもあります。どうか、大学院の間に、優れた研究成果を挙げるとともに、科学者としての正しい態度と高い倫理観を身につけてください。皆さんの大学院生活が充実して実り多いものになることを願っています。

滋賀医科大学は1974年10月1日に創立され、ちょうど本日創立40周年を迎えました。10月3日には、40周年記念式典を挙げる運びになっています。これまでの40年間に本学を卒業した学生は4,400名を数え、それらの卒業生は滋賀県をはじめとして、全国の医療機関、大学などで活躍しています。また、これまでに1,130名の方が博士の学位を、180名の方が修士の学位を授与されました。

社会における滋賀医科大学卒業生の評価は高く、我々の大きな誇りであります。引き続き、地域・国、そして世界で活躍する高い志と広い視野を持った人材、リサーチ・マインドをもった clinical scientist、豊富な知識・教養と倫理観を備えた次世代のリーダーを育成するために大学を挙げて教育に力を注いでいきたいと考えています。今後10年、20年の滋賀医科大学の発展には、若い皆さんの力が不可欠であります。この滋賀医科大学における学習と研究が実を結び、皆さん一人一人が医学の発展と優れた医療の実践に貢献されることを期待しています。

本日の滋賀医科大学へのご入学を心からお祝いし、皆さんの今後のご活躍を祈念して、式辞といたします。

平成26年10月1日

後期学士編入学



■ 後期学士編入学 17名



平成26年度秋季入学者



■ 博士課程入学 7名



■ 修士課程入学 1名



第40回 解剖体慰霊式

去る10月23日(木)午前10時から本学体育館において、ご遺族、ご来賓、しゃくなげ会会員様及び教職員・学生合わせて580名が参列し、厳かに第40回滋賀医科大学解剖体慰霊式が執り行われました。

今回は、系統解剖42霊、病理解剖32霊、法理解剖97霊、計171霊を新たにお祀りし、御霊のご冥福をお祈りしました。

慰霊式は、最初に参列者全員で御霊に黙祷を捧げ、諸霊芳名拝誦、塩田学長による慰霊の辞、学生代表の慰霊の詞、高橋しゃくなげ会理事長の献辞の後、出席者全員による献花が行われました。

最後に、ご遺族代表及び、本学教授代表として病理学講座の杉原教授から挨拶があり、閉式となりました。



塩田学長による慰霊の辞



学生代表による慰霊の詞



出席者全員による献花が行われました

平成26年度 研究動物慰霊式

10月28日(火)午後3時から、滋賀医科大学研究動物慰霊碑前において平成26年度研究動物慰霊式を執り行いました。

慰霊式には、学長、副学長をはじめ127名が出席し黙祷を行った後、動物生命科学研究センター長の小笠原一誠教授、利用者会議議長の相見良成准教授より慰霊の辞が述べられました。

その後、出席者全員による献花が行われ、過去一年間(平成25年10月～平成26年9月)に実験に供された動物の御霊の冥福を祈りました。



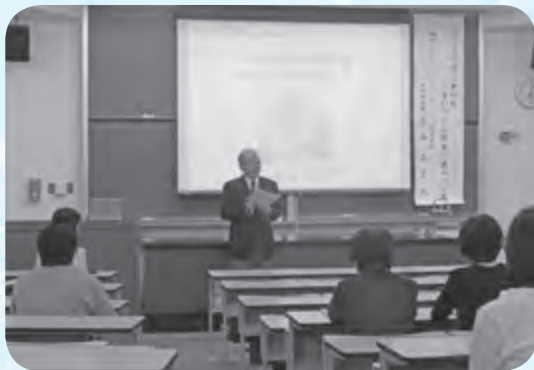
男女共同参画推進のための講演会

青いバラの開発に成功されたサントリーホールディングス(株) 知的財産部の水谷 正子氏をお招きし、若鮎祭実行委員会と共催で講演会を開催しました。

水谷氏は、不可能の代名詞であった「青いバラ」を商品として世に送り出す研究に携わってこられました。それは、まさしく世界のライバル会社・研究所との競争でしたが、このような厳しい競争にさらされながらの研究開発中に、3回の出産と育児を経験し、さらに学位も取得されました。いずれも犠牲にすることなく2004年に最初の青いバラが完成し、2009年11月には「Applause (喝采)」と名付けられた青いバラが市場に出回ることとなりました。

青いバラの開発終了後は、弁理士の資格を取得され、知的財産権の側面から研究に関わる仕事にキャリアを移されました。弁理士受験中にも第4子を妊娠、1次試験終了の1週間後に出産、育児をこなしながら2次・3次試験をクリアし見事合格されました。氏が、女性研究者のロールモデル的存在である理由は、仕事とライフイベントを両立され、さらにキャリアパス・キャリア向上を目指されたところにあります。

講演ポスターの「『ワークライフバランス』といえるほど均整のとれた人生には程遠いですが、非常にスリリングな綱渡りの毎日の中で感じてきたことを、青いバラ開発の苦労話とあわせてお話ししたい」との紹介どおりの内容に共感し、感銘を受けた聴衆から出された多くの質問にお答えいただき、閉会となりました。



開会の挨拶



水谷氏による講演



会場の様子



閉会の挨拶



SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

勢多だより

DECEMBER XX, 2014

編集後記

元来面倒くさがりで最近車内でのBGMはホロヴィッツやケン
プばかりでしたが、先日ふと書棚の「たたかう音楽」が目にとまり、
四半世紀ぶりに高橋悠治のゴルトベルク変奏曲を聴きました。
音を奏でることによって心象を表現する術を持つことになおされた学生
時代の様々な出来事が懐かしく思い出されました。

学生の皆さんが今聴いている音楽を数十年後に聴きなおしたと
き、どのような情景を思い出すのでしょうか。それが温かく優しい
思い出であることを願っています。

編集委員長 宮松 直美

(勢多だよりの由来)

勢多は勢田、世多、瀬田とも書かれるが、古代、中世の文献では、
勢多が多用されている。それに勢多は「勢(いきおい)が多い」とい
う佳字名称である。従って、いきおいが多かれと願う本学関係者の
想いにぴったりということで、瀬田とせず、あえて勢多とした。

(題字は、故 脇坂行一初代学長による)

勢多だより No. 100

発行年月日：平成26年12月22日

編集：「勢多だより」編集担当者会議

発行：滋賀医科大学広報委員会



滋賀医科大学

SHIGA UNIVERSITY OF MEDICAL SCIENCE

学章の説明

「さざ波の滋賀」のさざ波と「一隅を照らす」光の波動とを組み合わせたもの。
「中心に向かって、外からさざ波の波動-これは人々の医への期待である。外に向
かって中心から一隅を照らす光の波動-これは人々の期待に返す答えである。」